

会報
第86号



一般社団法人 函館文化会

〒042-0955 函館市高丘町51番1号
学校法人野又学園 函館大学内
電話・Fax (0138) 57-1175
E-mail bunkakai@host.or.jp
URL http://hakodate-bunkakai.com/

令和5年「神山茂賞」贈呈式・祝賀会



お孫さんから花束贈呈



関係者による記念撮影



祝賀ステージは谷岡穰氏のトランペット演奏

(写真撮影:フォトスタジオ青山)

令和5年「神山茂賞」は、「箱館歴史散歩の会」を主宰する中尾仁彦氏に贈呈しました。贈呈式は、受賞された中尾仁彦氏の関係者をはじめ、ご来賓やこれまでの受賞者、函館文化会会員が集い、函館国際ホテルで開催しました。贈呈式後、中尾氏による記念講演、引き続いての祝賀会は、トランペット演奏の祝賀ステージで始まり、お祝いのメッセージや花束贈呈もあり、華やかな中にも和やかな雰囲気での祝賀会となりました。(贈呈式・祝賀会の内容は4ページに)

函館文化会 会報「巴響」 第86号 目次

| | | | |
|---------------------------------|----|--------------------------------|--------------|
| ◇令和5年神山茂賞贈呈式・祝賀会…………… | 1 | ◇令和6年度函館文化会「講演会」を開催します…………… | 20 |
| ◇令和6年度定時総会を開催…………… | 2 | ◇特集 郷土の歴史と文化を語り継ぐ⑨ | |
| ～会長に平原康宏氏を再選～ | | ～テーマ「湯の川温泉界限」～ | |
| ◇函館文化会「ホームページ」「ブログ」もご覧ください…………… | 2 | ・故郷 湯の川に育てられ… | 伊部宗博……………21 |
| ◇会長挨拶 | | ・湯の川温泉界限今昔 ～私のスケッチ～ | 船矢美幸……………23 |
| 「無理をしない」で「継続する」 平原康宏…………… | 3 | ・湯の川温泉界限が賑わった頃 | 小笠原勇人……………24 |
| ◇函館文化会役員名簿(令和6年度定時総会選任)…………… | 3 | ・湯の川の思い出 | 西村有人……………26 |
| ◇令和5年神山茂賞～中尾仁彦氏に贈呈～…………… | 4 | ・湯の川温泉の花火大会 | 大桃 誠……………27 |
| ・受賞記念講演 | | ・街歩き楽しさ 湯の川三昧 | 須藤由司……………29 |
| 100年後も函館っていいよねと言われたいから 中尾仁彦… | 4 | 原稿募集・次回テーマは「旧4町村」…………… | 30 |
| ・お祝いスピーチ 山田雄一、安立真由美…………… | 7 | ◇追悼 | |
| ◇令和5年度函館文化会講演会 | | 函館文化会顧問 金山正智氏、池見厚一氏 逝く…………… | 31 |
| アイヌ文化と函館 函館大学教授 中村和之…………… | 8 | ◇特別寄稿 | |
| ◇市民公開講座 | | ・ペリー提督箱館来航170周年に想うこと 中野 晋…………… | 32 |
| 第12回 湯の川温泉界限の魅力 | | ・道南女性史のこと… | 酒井嘉子……………33 |
| 函館市熱帯植物園園長 鈴木一郎…………… | 12 | ・函館「常磐町」の変遷と大石の松 古野柳太郎…………… | 35 |
| 第13回 幕末開港期から明治初年の函館とロシア語 | | ◇函館文化会への図書等の寄贈…………… | 36 |
| ロシア極東連邦総合大学函館校教授 倉田有佳…………… | 14 | ◇会務報告 | |
| 「市民公開講座」は、ロシア極東大学函館校で開催しました… | 17 | ・令和5年度事業報告…………… | 37 |
| ◇卓話 | | ・令和5年度収支決算…………… | 39 |
| 第19回 地域学のみかた・楽しみかた+(プラス) | | ◇函館文化会会員名簿…………… | 40 |
| 北海道教育大学非常勤講師 根本直樹…………… | 18 | ◇編集後記…………… | 40 |

令和6年度定時総会を開催

～ 会長に平原康宏氏を再任 ～

一般社団法人函館文化会の令和6年度定時総会が5月28日（火）午後1時30分からプレミアホテル－CABIN PRESIDENT－函館において、会員総数162名のうち133名（委任状出席を含む）が出席して開催されました。新型コロナウイルス感染症の5類移行から1年が経過し多少落ち着いた状況にはありましたが、これまでと同様に出席者の健康と安全を考慮しながら開催し、提出された議案・報告は全て原案のとおり承認・了承され、無事終了いたしました。

以下、定時総会の内容について、その概略をお知らせします。

定時総会は、平原康宏会長挨拶の後、定款の規定により会長が議長となり議事に入りました。今定時総会に付議された議案・報告は

- 議案第1 令和5年度事業報告について
- 議案第2 令和5年度収支決算及び監査報告について
- 議案第3 役員（理事・監事）の選任について
- 報告第1 令和5年度収支補正予算について
- 報告第2 令和6年度事業計画について
- 報告第3 令和6年度収支予算について

の6件で、議案第1と議案第2及び報告第1は関連がある

ことから事務局より一括して説明、次いで山田涼子監事から5月21日実施した監査について「関係諸帳簿等を精査した結果、正確、適正に執行されていると認める」との監査結果報告があり、審議の結果、いずれも満場一致で承認・了承されました。

なお、承認された令和5年度事業報告・収支決算については、別掲（37ページ）のとおりです。

また、報告第2及び報告第3として、3月27日開催の令和5年度第4回理事会において議決された令和6年度事業計画・収支予算について一括説明があり、いずれも満場一致で了承されました。新年度の事業の主なものは、「神山茂賞の贈呈」を継続して実施、同日開催の「受賞者を祝う会」には多くの会員に参加を呼びかけ、会員交流の場にもすること、また、「函館文化会講演会」は、10月12日（土）函館市中央図書館で、箱館英学研究家の井上能孝氏を講師に「もし箱館に黒船が来なかったら～ペリー来航170周年に想うこと～」を演題に開催を予定していること、さらに「郷土の歴史・文化等を学び・探求しながら、受け継がれてきた“郷土の歴史と文化”を後世に継承する」ことを目的として開催している「市民公開講座」も様々なジャンルの方を講師に迎え、継続して実施することが報告されました。

議案第3の役員（理事・監事）の選任については、事務局から説明後、会場から「議長一任」の声があり、議長から示された役員・監事の候補者を順次諮り、いずれも異議なく、選任に同意。新役員選任後、新理事会において会長等の互選が行われ、会長に平原康宏理事を再選、以下新役員が別掲（3ページ）のとおり決定しました。



函館文化会「ホームページ」「ブログ」もご覧ください

「函館文化会」の知名度の向上と活動の推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び案内、報告などの情報を、インターネットを通じて全国・世界に発信することを目的に函館文化会「ホームページ」、「ブログ」を開設しております。

一度ご覧いただき、ご感想・ご要望など事務局にお寄せください。アドレスは、次のとおりです。

- ・ホームページ <http://hakodate-bunkakai.com/>
- ・ブ ロ グ <http://blog.livedoor.jp/bunkakai/>



会長挨拶

「無理をしない」で「継続する」



一般社団法人 函館文化会 会長 平原康宏

フランスで開催されたパリオリンピック、日本選手の活躍は連日メディアを賑わし、海外で開催されたオリンピック史上最多の金メダル20個を獲得した。戦いに勝っては泣き、負けては泣く選手の姿を見るにつけ、これまでの厳しい練習を思い浮かべてのことだろうと、ともに涙しながら感動をする場面も多かった。健闘した日本選手を称えたい。

若い頃から、趣味でゴルフとスポーツジム通いを続けている。しかし、80代半ばを過ぎ、今までの生活リズムを変えようと練習方法を見直すことにした。これまでは、ただがむしゃらにやっていたことに気づき、これからは「無理をしない→力を抜く」「継続する」を目標にすることとした。

結果、ゴルフは力を抜くことでこれまでより距離が出るようになり、コントロールも付いてきた。また、今までは力任せにスイングしていたため、ド・スライスやチョロの連発も度々あったが、自分でも驚くほど球が飛ぶようになり、ゴルフは力でないことが今にして分り、早く気が付けば良かったと痛感している。これなら90歳過ぎても出来ると若干自信がついた。

スポーツジムも力まず無理をしないで、マシンを絞って12~13種を基本50回と決めて身体を動かしている。重量も重くしないように調整し約1時間取り組んでいくことにした。無理をしないことが長続き出来ることだと気が付いた。

ところが、先日我が家の冷蔵庫の冷凍室の調子が悪く、開けてみたら冷凍室にたまった水が氷になっていたため、その氷を取り除こうとして持ち上げたところ腰が「ギクッ!!」、あれれ、ギクッリ腰を患ってしまった。

ちょっと無理をしたために、これまで継続していたゴルフもスポーツジムにも行けず、すっかりリズムが狂ってしまった。あらためて「無理をしない」「継続する」ことが大事であることを身に染みて感じた。早く治し、また下手なゴルフやスポーツジムに取り組みたいと思っている。

函館文化会は明治14年（1881）に創設以来、今年で143年目を迎える。これまで「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図る」との定款に掲げる趣旨に鑑み取り組んできたが、これからも会員相互の交流を積極的に図りながら「郷土の歴史と文化の伝承」をテーマに事業を展開し、郷土の文化のさらなる振興発展を目指していきたいと考えております。会員皆様のご支援・ご協力をお願いします。

一般社団法人 函館文化会 役員名簿

| | | | | | |
|-------|----------|-----|-------|-----|---------------|
| ○会長 | 平原康宏 | ○理事 | 佐々木 茂 | ○理事 | 山本真也 |
| ○副会長 | 繪面和子 | | 佐藤育子 | | 若山豪(新) |
| | 櫻井健治 | | 須藤由司 | ○監事 | 佐々木俊克 |
| ○常務理事 | 上田昌昭 | | 中野晋 | | 宮脇智恵子(新) |
| ○理事 | 小笠原勇人(新) | | 藤井方雄 | | |
| | 小熊庸介(新) | | 藤井良江 | | (令和6年5月28日選任) |

この度の役員改選で、五百川忠氏、小笠原孝氏（令和6年3月19日逝去）、若山直氏、山田涼子氏が退任されました。永年のご尽力に感謝申し上げます。また、逝去された顧問の金山正智氏と池見厚一氏については31頁の追悼記事をご覧ください。

令和5年 神山茂賞

箱館歴史散歩の会主宰

中尾仁彦氏に贈呈

函館文化会では、令和5年「神山茂賞」を「箱館歴史散歩の会」を主宰する中尾仁彦氏に贈呈しました。贈呈式は、受賞された中尾仁彦氏の関係者の皆様をはじめ、ご来賓やこれまでの受賞者、函館文化会会員など79人が出席して故神山茂氏の命日に当たる11月7日(火)函館国際ホテルにおいて行われ、函館文化会 平原康宏会長から「永きにわたり郷土の歴史や文化を市民と共に辿り、伝承する活動を継続されてきた。また、近年はSNSを活用し新たな情報発信の手法を用いて多くの市民がふるさと函館の足跡に触れることを可能にしたことが高く評価され、今後もさらなる活躍を期待する」と讃え、神山茂賞選考委員会委員長 杉浦清志氏から審査経過報告、函館市教育委員会教育長藤井壽夫氏からの祝辞があり、受賞された中尾仁彦氏からは「一生懸命やってきたことがこうして評価され喜びに堪えない」との謝辞がありました。

贈呈式の後、中尾氏による『100年後も「函館って、いいよね」と言われたいから』と題しての受賞記念講演が行われ、平成20年4月にスタートした「箱館歴史散歩の会」の歩みを振り返りながらテーマやコース設定など全て一人でやってきたことや最近ではアナログに加えてデジタルでも情報発信を行い、より参加者の共感を生み出そうと心がけてきているが、私達の周りから貴重な文化財産が失われているのを見ると、魅力ある函館の歴史と文化を後世に伝えていく「語り部」としての活動は、100年後も「函館って、いいよね」と言われたいからまだまだ続けていくとの抱負も語られました。

受賞者を囲んでの祝賀会は、祝賀ステージで谷岡穰氏によるトランペットでの“この素晴らしき世界”などの演奏で始まり、お祝いのメッセージや出席された既受賞者の方々の紹介、中尾氏にお孫さんから花束贈呈もあり、華やかな中にも和やかな雰囲気の中で盛会裡に終了いたしました。

なお、中尾氏の受賞記念講演内容を講演録で概要をご紹介します。

令和5年「神山茂賞」受賞記念講演

100年後も“函館って、いいよね”と言われたいから



令和5年神山茂賞受賞者 中尾仁彦

平成20年4月に「箱館歴史散歩の会」を立ち上げ、令和4年11月に15年目の区切りを迎え200回を達成しました。「歴史は人がつくり、街も人がつくった」、そんな想いを色濃く残す函館発祥地・西部地区をはじめ、東部地区も巡りながら、歴史、文化、風土と郷土の記憶を訪ね歩いてき、また、たくさんの方々とふれあい、共に学びながら何気ない街の断片を地道につなぎ合わせて輪を広げてきた16年間です。

マスコミの方からよく二つの質問を受けます。一つはなぜ郷土史に興味を持ったのか？二つ目は「箱館歴史散歩の会」の会員は何人いるのか？と。

まず、前者からお答えすると

私はサラリーマンをしていた57歳のとき、当時の私は、第二の人生は60数歳になったら始まるのか？と考えていました。しかし、一足先に第二の人生に入った先輩たちから、今のうちに何か打ち込むことが出来る「生きがい」をキチンと持ち、早めに退職後の準備をなささい、退職してからでは間に合わないと言われまいりました。そこで私は何か社会に貢献することが出来るだろうか、趣味を上手くつないで多くの方と交流していくことが出来るだろうかと考え始めます。音楽・美術などの芸術やスポーツをやっている人は、人の交流がしやすく比較的第二の人生を生きやすいんじゃないかと思いますが、私は残念ながら芸術がまったく駄目でスポーツもあまり誇れるようなものではなく思案に暮れました。

そのときふと小学4年生の頃に何となく函館の歴史に興味があったことを思い出しました。何よりも函館発祥地の西部地区を自由に動けるし、郷土史の宝庫である函館図書館の存在も心強いので、これであれば興味を持つことが出来るかもしれないという風に感じました。しかし、私の回りに郷土史を学んでいる人はいなく、ヘルプを受けることが出来なかったのです。さて、どこから手がかりを作ろうかと暫し考えます。

とりあえず広く基礎的な勉強から開始しました。というのも毎日、新聞を見ていると必ず郷土の歴史のことが載っていることに気付き、新聞を丹念に見て取り合えず手軽にできるスクラップから始めました。スクラップしたものをクリアファイルに日付順に整理をし、同じテーマが出てきたら同じページにどんどん重ねていく。続けていくと例えば石川啄木や箱館戦争等の項目が大量に出現するため別冊ファイル化とします。現在も作業を続けていますが優に60冊を超えています。基礎を広く学ぶためには、新聞は要領よく記載され比較的時間違いが少なく、とても身近な存在であり役立つものでした。現在の街歩きの解説でも7～8割は新聞のスクラップから得た情報を活用しています。ただ、もう少し深く掘り下げた資料が必要な時は、もちろん図書館へ足を運びます。現在の図書館は、コンピュータで手軽に資料検索が出来ますが、私が郷土史の勉強を始めた頃の旧図書館は、検索のコンピュータ化はしておらずアナログに調べざるを得ませんでした。基礎知識が不足な私にとっては、どんな本や資



二十間坂付近をぶら探訪（写真は函館ぶら探訪FBから）

料があるのかさえ、皆目見当が付きません。そのため係の人を煩わし、調査内容を伝えて長年蓄積した知識をお借りして書籍を探して貰っていました。その本を読んでいくとその資料の原典が出てくるので、芋づる式に辿っていき少しずつ本に馴染んでいったものです。

2年間ほどコツコツとスクラップを継続していたある日、当時病院事務職員をしていた私を見知らぬ人が訪ねてきました。一年以内に医療雑誌の発行を計画し準備をしているので、できれば医療人の紹介や医療業界の情報を伝えて欲しいとの依頼でした。当時函館に医療雑誌はなかったので、その計画に賛同し協力することにしましたが、その打ち合わせ中の雑談で、私が函館の歴史について話したところ、その話しは面白いから雑誌の2頁に郷土史を掲載しないか？と持ちかけられたのです。結局、年4回の季刊誌に延べ8年間、30数回にわたる長期連載につながりました。そしてこの連載が、市民の皆様と私をつなぐ接着剤の役割を果たしてくれたのです。

その後、私は63歳でいよいよ第2の人生に入りました。手始めに体力・精神力がどのくらいあるのか試そうと東京から京都まで東海道五十三次（約550km）を一人で歩いてみようと考えたのです。計算上は1日40kmのペースで歩けば14、5日間で完歩できます。実際に歩いてみたら悪戦苦闘の日々ではありましたが、何とか達成できました。この経験は大きく、おぼろげながらも新しいことにチャレンジする旺盛な意欲の確信につながりました。

先程、私には趣味は何も無いと話しましたが、只一つ、ウォーキングは私の現在も続いている大事な趣味で、これを契機に郷土史の勉強に一層拍車がかかったのです。その頃函館市の委託で移住者にアドバイスする団体があり、そこで移住者対象にボランティアでアドバイザーを

やって欲しいという要請がありました。その要請を受け入れ暫くすると、移住者の一人が私の書いた連載を読んでおり私が郷土史に詳しいということを知ってくれ、それがきっかけで移住者に街案内をしてくれないかとの依頼に繋がったのです。でも私は移住者だけではなく、市民との交流を深められるように、また、何の縛りもなく誰でも参加できるようにしたい。そのためあえて会員制は採用せず、学び方を自由に創造できる例会を目指す方向性を説明しました。と、「願ってもないことですよ!!」と話がトントン拍子に進み、街歩きの活動が始まりました。すなわちウォーキングのアウトドアと郷土史の勉強のインドアの二つの趣味をドッキングさせることができ、平成20年に「箱館歴史散歩の会」を立ち上げることになったのです。以来、新聞社が何かと取り上げてくれたお陰で毎回100名を超える参加者に支えられてきました。時に150名もの参加者になることもあり、人数が多くなり過ぎると「解説が聞こえない」などの苦情がありそれなりに苦労があったのです。以上が、なぜ郷土史に興味を持ったのかと「箱館歴史散歩の会」立ち上げの経緯です。

もう一つの質問ですが、「箱館歴史散歩の会」の会員は私一人ですと答えると怪訝な顔をするマスコミ関係者が多いのです。箱館歴史散歩の会の手順をいうと、当初は「郷土の歴史再発見ウォーク」というイベント名で開始しました。最初の準備は、テーマを決める。次にテーマに合致する場所を10数か所探し、時間は10時から12時半と固定します。案内する箇所が多ければ2時間半で歩いて回りきれないので、10数箇所のコースに組み替える。当初は西部地区中心で歩いていましたが、同地区には急な坂が数多くあるのが悩みでした。コースを組み立てたら、次は案内する箇所に関する資料を集めます。此処までで80%です。残りは実際に歩いて下見をし、そして最後は当日の案内です。これらを全て私一人で行っています。ですから会員は何人かと問われると「私一人です」と答える訳です。その後、イベント名はより親しみのある現在の「函館ぶら探訪」と改称しました。そして、コロナ禍以降は密を避けるため、人数を制限して40人定員で行っています。マスコミを通じたすべてのお知らせは中止をして、Facebookのみで案内しています。人数を制限した結果、良かったことは話しが聞こえないという苦情が全く無くなりました。

近年はアナログに加えてデジタルでも情報発信を行い、



箱館高田屋嘉兵衛資料館（写真は函館ぶら探訪FBから）

より参加者の共感を生み出そうと心掛けてきました。

友人からの助言で7年前から始めたFacebookで事前に案内箇所の解説をアップしています。参加者にとっては当日いきなり解説を聞かされるのではなく、Facebookで予習できる利点があります。当日参加者が自分の目で見て、私のリアルな解説を聞き、自分の足で歩いて、その場に立ち参加者自身の感性で臨場感を味わえることは言うまでもないことです。その結果、資料や講演会だけでは決して得られない大きな効果が生まれました。さらに4年前から超強力なツールが加わりました。参加者のご好意で制作してくれる当日の私の解説動画をFacebookで発信するようになり「記憶と記録」の両面から複層的に函館の魅力をお伝えできるようになったのです。

私の街歩きは、歴史的なもの、文化的なものを解説することが多くありますが、しかし、普段何気なく見ているものや失われつつある身近な物を訪ね歩くことも実は街歩きの醍醐味なのです。

街歩きに参加している最年少は、4年前に中学1年生でした。誰よりも熱心にメモを取り、学校の行事にぶつからない限り毎回参加し、現在、高校1年生になっています。その彼に対し相変わらず一所懸命だねと私が声をかけたところ、彼は一言「我が街を知らぬは恥だ」と鋭い警句を返してきました、郷土愛の賜物です。

魅力ある函館の歴史と文化を後世につたえていく「語り部」としての私の活動はまだまだ続きます。

何故ならば「100年後も“函館って、いいよね”と言われたいから」…

中尾仁彦さんへのお祝いスピーチ



山田 雄一様

中尾さん、神山茂賞おめでとうございます…中尾さんの街歩き「函館ぶら探訪」で毎回一緒させていただき動画

を撮って編集し、それをインターネットのfacebook「函館ぶら探訪」として投稿しております山田雄一です。

街歩きは、毎回テーマに沿って月一回日曜日の10時から約2時間半中尾さんの案内で街を巡っています。今月5日の会で、前身の「郷土の歴史再発見ウォーク」時代から通算で213回約16年目になります。函館の街は本州の長い歴史ある街と比べると、たった200年あまりの間にギュッと詰まった魅力ある輝かしい歴史があります。アイヌの方々から江戸時代、幕末、外国に開かれ、武士も商人も外国人も活躍し、いくつかの戦争もあり、北洋もあり、青函連絡船もあり、そんな函館にはいたる所に歴史のワンシーンがあります。

「函館ぶら探訪」は、街を歩いてその歴史のワンシーン（新島襄がここから船に乗った、土方歳三がここに泊った、ニコライゆかりのハリストス正教会等々）の現地・現場に行ってお中尾さんが紐解いてくれます。実物や跡地でのお話しなので 書物からの情報とはまた違った生きた知識となっていきます。中尾さんのお話しは、原稿などを全く見ないでここで何年に、何があって、他の事とのかかわり等まさに「立て板に水」よどみなく話されます。私は撮影の為にいつもすぐ近くで聞いていますが、頭の中を見てみたいほど、すごい記憶力です。しかしこれをするには、事前に歩くコースを考え、実際に歩いて下見をし、話す内容を準備するという大変な作業を、毎回一人でやってられるのだと思います。我々参加者はただ聞いているだけでなく中尾さんが常々おっしゃっている「帰宅したら若い人たちにも伝えてください」を実践して素敵な函館の街の郷土の歴史をいろんな角度からもっともっと広めて行きたいと思っています。中尾さん、これからもいろんな形で函館の街の魅力を発信し続けてください。



安立 真由美様

私が中尾さんの主催される街歩きに初めて参加したのは、今から13年ほど前の2010年のことです。横浜から移住

してきたばかりで、まだ知りあいも一人もない頃でしたが、まちづくりセンターで手に取った1枚のチラシ「箱館歴史散歩の会」の案内を見て、当日の集合場所に行ってみたのです。

その日のテーマは西部地区の名建築めぐりで、函館の歴史も貴重な建築物も、まだ全然ピンときていなかった私にとって、中尾さんが話された和洋折衷の建物のことや、大火に負けないまちづくりのことは本当に魅力に溢れていて、「函館って素敵なおとこだな」と感動したことを覚えています。この街歩きが、現在の「函館ぶら探訪」として2016年に再開された時に、「Facebookで情報発信をされてはどうですか」と勧めてみたのです。次の開催日やテーマをお知らせしたり、コースの見所を事前に解説したりと、参加者とのコミュニケーションツールとして役に立つと思ったからです。立ち上げこそ少しお手伝いさせていただきましたが、「文章を打ち込んで、右側の三角印を押せばいいですよ」「写真を入れたいときは、カメラマークを押して、載せたい写真をクリックして下さい」などと説明すると、すぐにご自分で自由自在に入力されるようになりました。

中尾さんがFacebookを味方につければ百人力、それこそ鬼に金棒です。Facebookを利用すればコストをかけず、事前にコースを予習してもらうことができ、さらに当日参加していない人にも、同じ内容を追体験してもらうことができます。これに、私が当日の様子を写真でアップしたり、先ほど推薦者として登壇された山田様が動画を撮ってアップされたりと、ぶら探訪のFacebookは情報発信の強力なツールとなっています。こんな充実した街歩きを、無料で提供し続ける中尾さんは、まさに函館の宝です。これからもお元気で、末永くこの活動を続けていかれるように願っております。

令和5年度 函館文化会講演会

『アイヌ文化と函館』を演題に開催しました

函館文化会では、文化振興事業の一環として函館市中央図書館との共催で毎年「講演会」を開催しています。令和5年度は10月14日（土）中央図書館視聴覚ホールを会場に開催し、100名を超える多くの会員、市民の皆さんに参加をいただき盛況裡に終了いたしました。

講演会は、函館大学教授中村和之氏を講師に迎え「アイヌ文化と函館 ～馬場・児玉コレクションから紐とく～」を演題に、市立函館博物館、北方民族資料館に収蔵されている函館出身の考古学者馬場脩氏、北海道大学名誉教授児玉作左衛門氏が収集した資料からアイヌ民族の文化や歴史を話していただきました。

講師の中村先生は、中国江南地方で製作された龍や牡丹の文様が特徴の絹織物「蝦夷錦」について、中国東北部からアムール川流域を経て樺太、北海道そして本州へとつながる「北のシルクロード」を通して持ち込まれており、アイヌ民族は中国との交易を通じて文化を発展させていったこと、また、保存されている「蝦夷錦」を放射性炭素年代測定法により分析を行い、「蝦夷錦」が製作された年代の特定する研究も進められており、函館市が収蔵・保存する馬場・児玉コレクションは、アイヌの文化・歴史そして北方交易の研究に大きく貢献していることなどを話され、聴講された皆さんは多彩なアイヌ関連の話に興味深く聞き入っていました。



なお、今回の講演内容について、中村先生に概要を纏めていただきましたので、今一度講演会当時を思い起こし、ご一読いただければ幸いです

函館文化会講演会（令和5年10月14日）・函館市中央図書

アイヌ文化と函館 ～馬場・児玉コレクションから紐とく～

野又学園・函館大学教授 **中村和之**



はじめに

本日のお話は、文献史料を中心とした近年のアイヌ史の研究と、モノ資料からみるアイヌ史・アイヌ文化の研究の紹介の二つの内容からなります。

文献史料を中心とした近年のアイヌ史の研究についてお話する前に、知里幸恵と砂沢クラが伝えたことについて触れたいと思います。知里幸恵（1903～1922年）の『アイヌ神謡集』は、著者の死の翌年1923年に出版されました。その序文は、若くして世を去ったアイヌの女性が残した文章として有名です。

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんという幸福な人たちであったでしょう。

一方、砂沢クラ（1897～1990年）の『ク スクップ オルシペ』には、

むかし、むかし、アイヌたちは毛皮を船いっぱい積んで遠い海を渡り、アトウイヤコタン（海の向こうの国＝大陸）へ行ったら、宝物や着物、食べ物や酒と換えて帰って来ていました。……宝物の中に、大昔、アトウイヤコタンから持って来たという古い布がありました。絹糸の部分はすり切れ、金糸だけがすっかり茶色になって残っていました。ユーカラに歌われているコンカニコソソ（金の着物）にそっくりでした。あの布が残っていたら、いまの学問で調べると、アイヌがアトウイヤコタンまで行っていたことがはっきりわかると思います。

とあります。この二人は世代的にも近く、ともに旭川にいた時期があったため、砂沢クラの記録のなかには、少女時代の知里幸恵について触れた部分があります。世代的にも地域的にも重なっていた二人が、一方は自然と共生する存在としてのアイヌを語り、もう一方は遠隔地交易の担い手としてのアイヌについて述べています。知里幸恵の言葉は有名ですが、砂沢クラの言葉はほとんど知られていません。

この状況の背景には、近代の歴史学が持っていたある種の歪みがあります。もともと歴史学という学問は、いろいろなものごとを時間の経緯に従って整理し記述するものでした。ところが、19世紀なかごろに、ダーウィンの進化論的な考え方が優勢となりますと、歴史学は進歩して行くいわゆる文明社会のみを研究対象に限定してしまいます。「進歩しない」とされた社会は、民族学・民俗学あるいは地理学の研究対象とされました。アイヌ史も歴史学的な研究の対象から外されていくことになったのです。

今日のお話しのねらいは、「交易」を切り口に、アイヌ史を再検討してみようというものです。

北方交易の研究の進展がアイヌ史・アイヌ文化の研究に与えた影響

(1) モンゴル帝国・元朝のアムール川下流域への進出とアイヌ

さきに砂沢クラの言葉を引用しましたが、彼女が言うコンカニコソソというアイヌの着物とはいったい何を

指すのでしょうか。アイヌ語でコンカニは、金のことで日本語の黄金こがねからアイヌ語に入った言葉です。日本の東北地方の方言では、金属一般を意味する金＝「かね」を「かに」と発音します。コンカニの「かに」は、これに当たります。つぎにコソソは、日本語の小袖＝「こそで」からアイヌ語に入った言葉で、日本製の着物全般を意味する言葉として使われました。



蝦夷錦（四爪の龍模様刺繍）

ではコンカニコソソとはどのような着物なのでしょう。私の考えでは、この着物は蝦夷錦あるいは山丹錦のことです。蝦夷錦とは、前近代に北方交易でアイヌの人たちのもとにもたらされた中国製の絹織物の総称です。その文様は龍文が有名ですが、牡丹文などの花の文様のものもあることが知られています。後でお話しますが、現存する蝦夷錦はほとんどが清朝（1644～1912年）の時期に作られたものですが、アイヌの北方交易そのものは元朝（1271～1368年）の時代までさかのぼります。

アムール川下流域とサハリン島についての文献史料が残っているのは、元朝の時代以降です。『元一統志』には、遅くとも金代にはアムール川の下流域に奴児干城が置かれたと記されていますが、この位置はヌルゲン／ヌルガンという地名から見て、元代に東征元帥府が置かれ、明代にはヌルゲン都司が置かれた、現在のティル村のことと思われます。ただし発掘によって位置がわかっているのは、明初に女真人の宦官イシハによってヌルゲン都司に併設されたヌルゲン永寧寺の址のみで、東征元帥府やヌルゲン都司の実態はわかりません。元帥府や都司（正しくは都指揮使司）という名称が連想させるような、官銜を構えていたかどうかは不明です。

モンゴル帝国は、かつては残虐な侵略者として描かれてきました。しかし近年の研究は違います。確かにモン

ゴルは殺戮を行いはしましたが、それはあくまで抵抗した場合に限られます。最初から降伏の意志を表した者に対しては、税金を納めることを条件に、それまでの生活を認めました。また、ほんの数回あった殺戮の事実を意図的に広めることにより、相手の恐怖をあおり立て、降伏するように促したというのです。モンゴル帝国に従った者は、少額の商税を納めるだけで、モンゴル帝国の交易ネットワークのなかで交易を行うことができました。そしてその交易ネットワークは、ユーラシア大陸を覆う巨大なものでした。このような繁栄の時代を「大モンゴルの時代」と呼ぶこともあります。ユーラシア各地の人びとと同様に、アイヌの人たちもまた、モンゴルの交易ネットワークのなかに組み込まれてその後の歴史を歩んでいくことになったのです。

(2) アイヌの銀鼠（オコジョ）の沈黙交易とモンゴル宮廷のジスンの宴

アイヌの人たちの交易についての興味深い史料が、熊夢祥『析津志』^{ぼうしょう せきしんし}にあります。この史料の成立ははっきりしませんが、だいたい14世紀の前半と考えられます。サハリン島（樺太）でアイヌと元朝に仕える野人と呼ばれる人びとが、銀鼠（オコジョ）の毛皮と中国の物資の沈黙交易を行っていたというのです。沈黙交易という直接接触をしない原始的な交易の形を採りながら、元朝とアイヌとの間に交流があったことがわかります。その理由は、元軍と骨嵬との間に紛争が続いたため、アイヌは野人のように、元朝と朝貢交易を行うことが許されなかったためと考えられます。

オコジョの毛皮の用途について触れておきます。モンゴル帝国・元朝では、1年に13回、ジスンの宴という宴会が開かれていました。ジスンとはモンゴル語で色の意味であり、参加者が同じ色の衣装を着て集うことによって一体感を高めました。モンゴルの宮廷で最も重視されたジスンの宴は、正月の「白い宴」であり、大カアンなどの王族は皆、白い毛皮を着たことがマルコ・ポーロの記録にあります。このように戦いの一方で、元朝はアイヌからオコジョの毛皮を得ていました。アイヌは、モンゴルの毛皮交易ネットワークの北東辺境部における交易相手でもあったのです。

(3) 明朝のアムール川下流域への進出とアイヌ

元代に続く明代には、永楽帝の命令でティル村にヌル



「東韃紀行」写本

ゲン都司を設置したイシハラが、ヌルゲン永寧寺を併設しました。イシハラが立てた1413年の「勅修奴兒干永寧寺記」^{ちよくしゅうヌルゲンえいねい}を読むと、ヌルゲンから海の外、つまりサハリン島にアイヌが住むと認識されるようになりました。明代にはアイヌが朝貢交易の相手として認識されていたことがわかります。明朝は「衣服」を下賜したと記録にありますが、これは絹織物であった可能性が高いと思われます。イシハのアムール川下流域への遠征は計7回を数えましたが、サハリン島にまで軍勢を進ませたかについては、証拠がありません。1435年に宣徳帝が死んだ後は、明軍がアムール川下流域に派遣されることはなくなりました。さらに1449年の土木の変で、明朝は北東アジアにおける勢力圏を失いました。しかし、建州女直によって交易は続けられており、錦もアムール川下流域に持ち込まれていたようです。そのことと関連すると思われる史料が、松前藩の『新羅之記録』にあります。1593年、松前藩の初代藩主・蠣崎^{かきざき}（後に松前^{まつまえ}）慶広は、肥前の名護屋城で徳川家康に面会しましたが、身につけていた「唐衣」を家康から褒められると、すぐさまこれを脱いで献上したと伝えられています。「唐衣」には「サンタンチミフ」という読みがつけられています。これはアイヌ語で「山丹の着物」という意味です。

モノ資料からみたアイヌ史・アイヌ文化の研究の成果

(1) 蝦夷錦の放射性炭素年代測定が明らかにしたこと

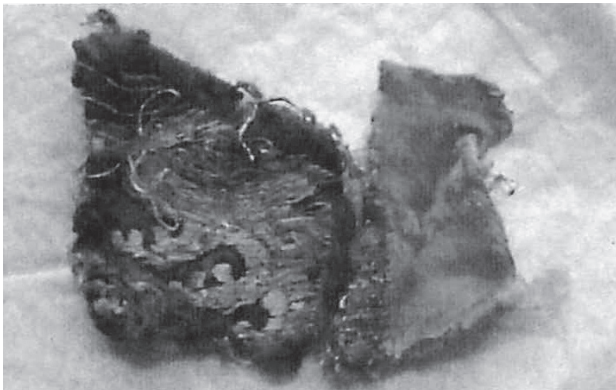
先にもお話ししたように、多くの蝦夷錦は来歴がはっきりしません。この問題を解決するために、名古屋大学の小田寛貴氏^{おだひろたか}との共同研究によって、¹⁴C年代測定により蝦夷錦の年代を明らかにしようとなりました。研究を進めるためには、信頼度の高い資料の年代を測定し、その

年代と比較することが必要です。私たちの共同研究の基礎となった資料は、市立函館博物館が所蔵する2着の蝦夷錦です。

私たちの調査のなかで、ひとつだけ飛び抜けて古い数値を示す資料が見つかりました。それは、現在はロシア連邦サハリン州のユジノサハリンスク市にある、サハリン州郷土博物館蔵のニヴフ（旧称はギリヤーク）の帽子です。この帽子は北西岸のルポロヴォで収集されたもので、毛皮に青地の蝦夷錦が縫いつけられています。青地の蝦夷錦の下からは、赤地の牡丹文と龍文の蝦夷錦を接ぎ合わせた帽子が出てきました。赤地のほかにはこげ茶や浅黄色の生地もあり、何枚かの蝦夷錦は魚の皮を細く割いたものではぎ合わせてありました。

私は、補修の過程で出てきた端切れを7点、年代測定の分析資料として提供していただきました。7点のうち6点までの年代は、16世紀から18世紀の間を示していました。清朝がアムール川下流域に勢力を伸ばした時期は17世紀の終わりから19世紀の初めですから、やや古い年代もありますが、資料の伝世という事情を勘案すれば、絶対にありえない値ではないと思います。北海道の蝦夷錦から得られた数値も同様です。

しかし下の写真の向かって右の黄色の錦の布切れの年代は、1324年から1346年の範囲、および1393年から1432年の範囲に相当し、1411年である可能性が最も高いという結論でした。この資料の¹⁴C年代測定の結果が信じうるものとすれば、この資料は明代の初めのイシハの遠征によってアムール川下流域・サハリン島にもたらされた可能性が高いということが出来ます。ヌルゲン都司は15世紀の半ばには機能を停止したと考えられるので、この黄色の錦が15世紀後半以降にアムール川下流域に持ち込まれた可能性は低いと考えられます。したがって、この錦はイシハの遠征によってティル村まで運ばれ、そこで



ニヴフの帽子から採取した蝦夷錦の断片

朝貢交易の下賜品として、先住民に与えられたものと考えられます。もしこの考えが正しいとすれば、この錦は、サハリン島の北部で600年近くも大切に保管されていたことになるのです。

(2) 馬場コレクションと児玉コレクションのタマサイ（首飾り）の編年案

もうひとつの例を紹介します。市立函館博物館蔵の馬場コレクションと児玉コレクションのタマサイについての研究です。現在、北海道を含めて多くの博物館・資料館に収蔵されている伝世品のタマサイについては、近代・現代にコレクターや古物商によって玉や銭貨の組み替えが行われたと考えられます。そのため、現存する形は元のものではないと考えられてきました。これに対して弘前大学の関根達人教授らのチームは、銭貨を中心として、これにガラス玉の大きさや色合い、シトキの形式なども勘案して、伝世品のタマサイを以下の5段階で新旧に並べられるのではないかと試案を発表しました。すべてではないにしても、タマサイには元の形を保存しているものがあるということです。この試案が正しいとすれば、近世のアイヌの人たちはガラス玉や銭貨を安定的に入手できる環境にいたと考えられます。

I 期：17世紀後半（古寛永を最新銭とする）

II a 期：18世紀（新寛永を最新銭とするもののうち、宋銭や明銭を含むもの）

II b 期：18世紀後半～19世紀（新寛永を最新銭とするもののうち、足尾銭や高津銭、鉄銭・真鍮四文銭を含むもの）

III a 期：19世紀（道光通寶を含むもの）

III b 期：19世紀後半以降（箱館通寶や文久永寶、金ポタンを含むもの）

おわりに

以上、「交易」を切り口とした場合、アイヌ史についてどのようなことが言えるのかについてお話しをしてみました。最後にひとつ申しあげたいのは、収集時期と収集場所がある程度明確な資料がないと、研究は進まないということです。私たちの研究は、函館に残されているアイヌコレクションを使わせていただいて、成果をあげることができました。一方でこれらのコレクションは、将来、新しい研究が行われる可能性を保障するものでもあるということです。

函館文化会 市民公開講座

函館文化会では、郷土の歴史・文化などを学び、探求しながら、受け継がれてきた「郷土の歴史・文化」を後世に継承することを目的に「市民公開講座」を開講しています。

今年は、3月に函館市熱帯植物園を会場に「湯の川温泉界隈の魅力」と題し、函館市熱帯植物園園長の鈴木一郎氏を講師に、また8月にはロシア極東連邦総合大学函館校を会場に「幕末開港期から明治初年の函館とロシア語」と題してロシア極東連邦総合大学函館校教授の倉田有佳氏を講師に迎えて、2回の講座を開催しました。いずれも多数の会員・市民の方に参加をいただき、それぞれ講師の興味深い話しに受講された皆さんから好評を博しておりました。

なお、2回の市民公開講座の内容について、講演録で概要をまとめましたのでご紹介します。

第12回市民公開講座（令和6年3月15日・函館市熱帯植物園）

湯の川界隈の魅力、今昔

函館市熱帯植物園 園長 鈴木一郎



函館の数ある町の中でも湯の川町は個性の強い記憶に残る魅力ある街のひとつである。そこには、何といても「湯の川温泉」がある。

湯の川温泉は、津軽海峡を望む海岸線と松倉川沿いに約30の温泉施設が立ち並ぶ北海道屈指の温泉郷で、登別温泉（登別市）、定山溪温泉（札幌市南区）、湯の川温泉（函館市）のこれら3箇所（北海道三大温泉）の中で最も長い歴史を持つ。

1653年に開湯された歴史をもち、現在は年間180万人が宿泊するほどの人気温泉となった。旅館でくつろぐだけでなく、周辺には見どころやチョイ食べスポットが多数あるので、食べ歩きながら散歩を楽しめる。湯の川温泉発祥の地と言われている湯倉神社やサルに出会える熱

帯植物園のほか、とにかく熱いことで有名な温泉銭湯や疲れた足を癒すのにピッタリな足湯など、散歩コースには楽しみがいっぱい。夏から晩秋にかけての夜には、沖合で揺れるイカ釣り漁船の漁火を見ることができ、宿によっては漁火を見ながら湯浴みが楽しめる。

昭和40年頃、湯川に市電で行くとまず当時のシンボリック存在であった名月園の旅館が眼前に迫ってくる。そして湯川に来た!!というワクワクした気持ちになったものである。名月園の中華料理が当時としては最高に美味しかったのを思い出す。そして、市電で最後の停留所まで行くと、湯倉神社、湯川寺などの歴史のある神社仏閣に巡り合う。

つい先日、湯川寺の写経会というものに参加してきた。京都を連想するような静かな和室で高価な線香の香りの中で、1時間ほど写経というものに挑戦して、出来上がった写経を本堂で提出して、若住職に経をあげてもらい、コーヒーを頂き、爽やかな気分でその日、一日過ごさせてもらったが、これもまた、湯川の魅力の一つだろうと思う。そして、湯川寺には歴史ある三十三観音があり、1834年より西国三十三観音の分霊所とされている由緒ある観音様です。

湯の川温泉の歴史

伝説では、1453年に木こりが腕を怪我したときに、森

の中に温泉が自噴している場所を見つけて、そこで湯治をしたところ、回復したということで、その御礼に薬師如来の祠をお祀りしたのが現在の湯倉神社の発祥とされている。文献によれば、正式な湯倉神社創建は1653年に松前藩第9代藩主松前高広が幼少の千勝丸の頃に眼病を患い、母の御告げに従い湯治したところ全快。その御礼に社殿を改造、薬師如来像を改修、鰐口を奉納したのが始まりというのが有力な説である。

また、1868年の箱館戦争の中、旧幕府軍総裁の榎本武揚が温泉通で、当時の湯の川の温泉を満喫していたようである。湯の川の近辺に野戦病院を開設して200人以上の負傷兵を湯治させていたその場所が現在の榎本町といわれている。

湯の川温泉と根崎温泉の二大温泉となった大正時代

大正時代になると、温泉ブームとともに湯の川温泉はさらに発展した。当時松倉川の東側（旧上湯の川村）は白湯系の根崎温泉、西側（旧下湯の川村）は赤湯系の湯の川温泉と大別され、千人風呂、万人風呂などと持て栄えられて、活況を競い合っていたようである。

多くの文豪や歌人・著名人が訪れた湯の川温泉

明治時代から大正、昭和初期にかけての函館は、仙台以北最大の町として札幌よりはるかに都市として重要視されていた。その証拠として、多くの著名人が湯の川温泉を訪れた記録が残っている。主だった記録を列挙してみると

幸田露伴明治20年（1887年）、芥川龍之介昭和2年（1927年）、与謝野寛、晶子昭和6年（1931年）、斉藤茂吉昭和7年（1932年）などで、ベープルース昭和12年（1937年）、昭和23年（1948年）は2度湯川温泉を訪れている。

北洋船団と湯の川温泉（函館の奥座敷）

明治に始まった北洋漁業は計り知れない経済効果を湯川温泉にもたらした。1925年1月に日ソ基本条約調印、1956年には日ソ漁業条約が締結され、函館が北洋漁業の基地となり日本全国から千人を超える漁師が集結、見送りの家族は湯の川温泉に宿泊して大いに賑わった。この活況は1977年の200海里水域（排他的経済水域EEZ）の設定まで続いた。

湯の川温泉の冬の風物詩として世界へ（函館市熱帯植物園・猿温泉）

湯の川には沢山の魅力ある場所がありますが、その一つとして、函館市熱帯植物園の猿温泉がある。この投稿を書いている私自身がその熱帯植物園の長なので、ここからは函館市熱帯植物園の猿山物語の話が中心になっていくことをご勘弁願いたい。

当園は2016年頃から入園者が大幅な増加に転じた。それはYouTubeを利用してニホンザルが温泉に入浴する映像を世界に配信したことから始まった。米国ABC放送よりの照会、中国国営放送、タイ国営放送などが撮影のため来園し、多くの国々の旅行会社より問い合わせが殺到した。しかし、コロナ禍での3年間は逆境に耐え、再び2023年より国内旅行者やインバウンド観光客により活況を迎えている。

この湯の川の植物園にいる猿たちの歴史を紐解けば、約53年前に遡る。1970年に函館市熱帯植物園が建設され、翌年の1971年にもっと市民の皆様や観光客の皆様にも喜んでもらいたいという趣旨で、横浜から20匹のニホンザルを連れてきたことに始まる。その猿たちの中に、初代ボス猿になる函太郎とその妻であるトモエがいた。函太郎はその後4年間ボスとして君臨して亡くなったが、その後を弟の函助（かんすけ）がボスを継ぎ、猿の数は3倍以上に増えていた。この2代目函助という猿は近代稀に見る猿としては人格者で、群れのメス猿や他のオス猿からも尊敬されていた。争いがあれば仲裁に入り、餌は全ての猿が食べ終わるのを見届けるまで自分は餌を食わず、餌の不足がある猿がいれば餌を分け与え、常に群れの平和を念頭に行動する猿であった。そして群れ全体の信頼を一身に受けていたほか、そのルックスもまさにイケメンでメス猿には優しく、絵に描いたような素晴らしいボ



温泉に浸かるサルたち

スであった。函助は昭和49年から平成11年までの25年間猿山のボス猿として君臨したが、亡くなった平成11年2月16日には既に100匹ほどの群れになっていて、その日は全ての猿が喪に服して静まり返り、猿の鳴き声は全く聞こえなかったと当時の飼育員が記録を残している。

その後、初代の函太郎と妻トモエの末裔にオス猿三兄弟と娘がいたが、この三兄弟のオス三匹はいずれもボス猿になるべく威張ったり、闘争などを繰り返していたため、三匹とも群れのメス猿たちや他のオスからの信頼を得ることはできず、ボスになることは出来なかった。その後も何匹かのオスがボスになりたくて立候補したものの、今日まで、特にメス猿たちに指示されるようなボス猿は現れていない。

現在、若いオス猿で跳び猿という名のボス候補の猿がいるが、運動神経は他を圧倒するくらいすばしこく、人間界ならばオリンピック選手のような猿なのだが、今一つ自己中心的なところがあり、群れからの信頼が薄く、ボス猿は無理だろうというのが飼育員全員の見解である。まだ若いので、もっと研鑽して将来立派なボス猿になるように願っているところだ。

動物愛護管理法は平成11年に改正、さらに平成17年、平成24年にも改正、そして昨年の令和5年5月にも厳しく改正され、当園のスタッフ飼育員8名は新動物愛護管理法に則ってこれからも動物愛護の精神を持って猿の飼育にあたっていくが、このような植物園が湯の川温泉の中に存在することにより、さらなる温泉街の魅力になるように願って精進していく所存である。

第13回市民公開講座（令和6年8月24日・ロシア極東連邦総合大学函館校）

幕末開港期から明治初年の函館とロシア語

ロシア極東連邦総合大学函館校教授 倉田有佳



「函館とロシア語」を考える上で着目すべきポイントは二つ。一点目はロシア語を教授していた主体。具体的には、①経費負担者は誰か、②「官」主導か、「民」が主体か、③教師はロシア人か、日本人か。二点目は、当然ではあるが、当時のロシア情勢、日露関係（外交・政治）、日本の国内情勢といった函館を取り巻く状況です。

1 19世紀半ば／幕末開港期

函館におけるロシア語教育は、ロシア領事館の開設

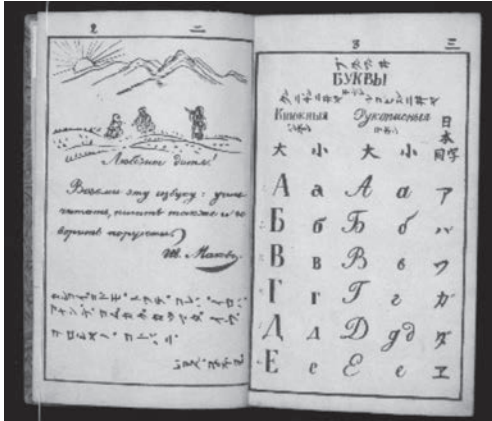
（1858年）と共に始まった。領事館のロシア人が教師となり、ロシア領事館の敷地内（現ハリストス正教会敷地内）にロシアの官費で建てられた建物が学校に充てられた。

イワン・マホフ「ろしやのいろは」

外務省の九等文官・ロシア領事館付属聖堂の読経者として、イワン・マホフは、老齡の父ワシーリ・マホフ（領事館付属聖堂初代司祭）と共に着任した（1859年6月）。子供のためのロシア語教本「ろしやのいろは」を自費で作成し、文久元年正月（1861年）に箱館奉行に提出した（将軍用、箱館奉行用のほか、函館・江戸・長崎・京都の子どもたちに各100部）。ロシア文字や日常挨拶がカタカナ併記された20枚から成るこの木版本は、函館の役人がロシア語を学ぶきっかけとなった。

「ろしやのいろは」は、1962年に市の有形文化財に指定され、1972年に函館市市制施行50周年記念事業「市民の船」で約300名の市民がナホトカとハバロフスクを訪

問する際の記念品として150部複製された。2007年には、北海道立函館美術館で開催された「日露友好150周年記念「ロマノフ王朝と近代日本」展」で、サンクトペテルブルクのロシア国立図書館所蔵と函館市中央図書館所蔵の「ろしやのいろは」が、並べて展示された。常木重吉が彫った版木も上述のロシア国立図書館に保管されていることが、2020年に当時の在ペテルブルク総領事のご厚意により確認できた。



「ろしやのいろは」(函館市中央図書館所蔵)



「ろしやのいろは」の版木
(サンクトペテルブルクのロシア国立図書館所蔵)

「ろしやのいろは」のことは、日本ロシア文学会編『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』(2000年、ナウカ)で言及されるほどで、その意義は、「函館」の枠に留まるものではない。ところが、イワンが「ろしやのいろは」に取り組んだ動機は、自分にはやることなく、暇にまかせ、他の領事館員がやっておらず、自分でもできる、当地で有用となるであろうこと、として思いついたものだったというから面白い。人生何がどう化けるかわからない。

他方で、イワンに対するゴシケーヴィチ領事の評価は、「領事館の中での立場がはっきりせず、功名心が強く、意志も弱い。」と手厳しい。確かに、イワンの時代にロシア語を学ぶ生徒たちが箱館奉行によって指名され、領事館敷地内にはそのための学校が整えられつつあったが、本腰を入れて取り組むのは、次のニコライ司祭からだった。

修道司祭ニコライとロシア語教育

1861年7月、領事館付属聖堂二代目司祭としてニコライ(俗名イヴァン・ドミートリエヴィチ・カサトキン)が着任した。1863年に本国に宛てた手紙には、ロシア領事館の敷地内にロシア政府の官費でつくられたロシア語学校で年齢の様々な6人の日本人にロシア語を教えたことと、その学校が既に2年続いていることが触れている。日本での布教が許されなかった函館時代のニコライは、神道など日本の宗教や習俗などを熱心に勉強し、将来に備えた。日本語学習を助けたのは、ロシア語をニコライに学ぼうと函館にやって来た日本人たちだった。

志賀浦太郎(親朋)

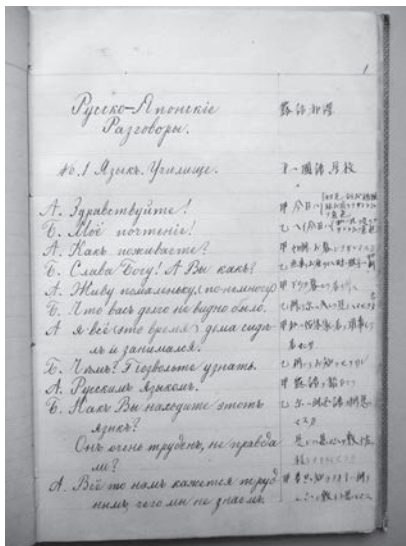
箱館奉行所のロシア語の最初の日本人教師は、志賀浦太郎という長崎は稲佐の出身者だった。ロシア語は、地元寄港するロシア軍艦の海軍士官から学び、実地で習得した。函館ではロシア領事館の通訳を1年間勤め上げ、1862年に箱館奉行所通弁御用に任じられた(1865年まで)。

この頃ニコライや志賀から教えを受けた生徒には、後に箱館奉行所魯語通弁として活躍する千葉弓雄、若山弁次郎、鈴木甚太郎(合田民蔵と同一人物?)がいた。

苦境のニコライ ロシア語教育に注ぐ熱意

1865年、ロシア領事館の西隣(現遺愛幼稚園)のイギリス領事館からの火事により、1860年春に完成した領事館、書記官と領事館付海軍士官の平屋二軒が全焼、翌年にはロシア病院が自火で焼失、という悲劇に見舞われた。しかし、領事館は新築されず、ロシア病院は長崎に引き継がれた。新たにロシア領となったウラジオストクが、ニコラエフスクに替わるロシア海軍の拠点となったことで、海軍の寄港地・冬営地としての函館港の重要性が低下したためである。

本国から思うような金銭的支援が得られぬ中、ニコライは執念にも近い、並々ならぬ熱意をロシア語教育に注ぐ。ゴシケーヴィチというサンクトペテルブルク神学大学の先輩で、かつての上司（1865年離函、1867年まで外務省アジア局に勤務）に宛てた二つの手紙には、苦渋と熱情が込められている。他にもこれらの手紙からは、「和魯通言比考」（1857年、サンクトペテルブルク刊）というゴシケーヴィチが元掛川藩土橋耕斎の協力を得て完成させた本格的和露辞典を教材に用いるつもりでいたこと、ニコライが日本人の教え子たちと辞書作りや会話の本の作成、さらには聖書訳にも取り組んでいたことがわかる。「会話の本」とは、「魯話和解」（ニコライ著、小野寺魯庵（魯一）・三輪魯鈍・嵯峨善次郎（寿安）、1867/慶応三年）のことで、函館市中央図書館にはこの筆写本がある。



魯話和解（函館中央図書館所蔵）

2 19世紀後半／明治初年

1867年の「カラフト島仮規則」で樺太全島が日露の雑居地として確認されたことに伴い、樺太での日露の摩擦事件が増す。樺太は開拓使の管轄地域であったため、北海道開拓次官黒田清隆は、ロシア領事館の置かれている函館こそがロシア語学校の開設にふさわしいと唱え、漢学と英学を教える「開拓使立函館学校」に「魯学」が併設された（1872年/明治五年十月）。ロシア人教師にニコライ司祭が推挙されるが、キリスト教解禁時代を見据えて上京したため、日本人スタッフのみでスタートした。ただし、その中には、ゴシケーヴィチ領事の進言で実現

した幕府派遣の元ロシア留学生田中清と緒方城次郎（惟孝。緒方洪庵の子）が含まれていた。緒方は同校の教材用に「魯語箋」（1873年、開拓使）を作成した。

当初不振だった「函館学校魯語科」も、ヴィッサリオン・サルトフの採用（1873年6月）で盛り返し、同年8月には独立した「魯学校」に改められた。同年末の生徒数は、前年の17名から39名に倍増した。ところが、翌1874年1月29日、サルトフが急死する。死因は脳溢血だった（函館のロシア人墓地に眠る）。学校は一時休校。同年2月再開、6月内容を改め、学校名も「松蔭学校」に改称。だが同校には、かつてニコライからロシア語を学び、ニコライの推挙を受けて藩・開拓使・明治政府の命でロシアに留学した面々（嵯峨寿安、小野寺魯一、来未甲蔵（来見幸蔵））が赴任してきた。ニコライの蒔いた種が芽吹き、ロシア語を教育する側として再び函館にやって来たことは意義深い。

しかし、この「松蔭学校」も「元町学校」と改称され（1875年11月）、翌年4月に廃校となる。この後、ロシア語通訳官の養成を目的とした官立のロシア語学校が函館に開かれることはなかった。「新しい国づくりに本格的着手を始める中で、ロシア語を教える学校も、短期間のうちに形を変えていかざるを得なかった」（『函館市史』通説編第二巻）のである。

明治という新たな時代を迎え、上京したニコライは、教会に必要なロシア語人材の育成に励み（1884年正教学校開校）、東京外国語学校（東京外国語大学の前身）魯語科が文部省によって創設された（1873年11月）。1875年には樺太千島交換条約が締結され、サハリン全島がロシア領となった。これらの変化が、「函館」でのロシア語教育の必然性を失わせた。ロシア語の拠点は、新首都東京へと移った。

余談ではあるが、明治初期の東京外国語学校でロシア語を選択した者に薩長出身者はなく（薩摩出身者の多い仏語、長州出身者の多い独語）、ロシア語は「立身出世」とは無縁な言語だった、という渡辺雅司東京外国語大学名誉教授の指摘は、英語全盛時代の1980年代に「ロシア語」を選んだ者としては、たいへん興味深い。

3 20世紀以降の函館とロシア語（補足）

20世紀以降は、「民」主体のロシア語学習が盛んになる。露領（後の北洋）漁業の基地函館で、ロシア語は有用か

つ身近な言語となっていたためである。漁場通訳に限らず、生活に溶け込んだロシア語のおかげで、ロシア語学習者のすそ野は広く、学習の目的・目指すレベルは多様化した。

ロシア語を教える私立学校の開設（ただし短命）、庁立函館商業学校でロシア語導入（選択科目として1898年から）、税関職員のためのロシア語講習会。個人宅でのロシア語の私塾や研究会、通訳協会による講習会、ロシア正教会の夜間講座。ロシア語学習や研鑽の場は多岐に及んだ。

教師には、東京の正教神学校で学んだ者が多かったが、1917年のロシア革命後は、函館に定住した亡命（白系）ロシア人（サファイロフ、カロ（ラ）リョフ、アルハンゲリスキー、成田ナデージダ）がロシア語教育の発展に寄与した。

20世紀後半（第二次世界大戦後）になると、学習目的が「政治・外交」や「経済」とは離れ、趣味や教養としてロシア語を学ぶ人が増え、その年齢や職業は多種多様だった。

おわりに

駆け足ではあるが、函館とロシア語の歴史を長いスパンで振り返ってみた。すると、「ロシア人教師からロシア語を学ぶこと」は、「函館の伝統」ではないかと思えてくる。現「ロシア極東連邦総合大学函館校」が、30年前にロシアの国立大学の分校として、首都東京ではなく「函館」に開校したことも、本学が函館市の姉妹都市ウラジオストクにあるという理由だけでなく、函館がロシア語教育の先進地で、ロシア語が身近な言語だったという歴史があつてのことではないかと思えてくる。



講堂での講座の様子

第13回「市民公開講座」は、ロシア極東大学函館校で開催しました



教室から眺める「八幡坂」



ロシア極東連邦総合大学函館校校舎



ロシア文化を紹介する「ロシアセンター」



民芸品も飾られてある「図書室」

第13回「市民公開講座」は「函館とロシア語」をテーマに、ロシア極東連邦総合大学函館校との共催で同校の講堂をお借りして開催した。ご承知のとおり、同校は昭和55年（1980）まで函館白百合学園高校として使用されていた建物で、現在は5階建てのうち2階と3階を使用しており、講座終了後、ロシアセンターなど極東大学ならではの特色ある施設を案内していただいた。



大学の活動を知らせる廊下の掲示板

● 函館文化会事務局からのお願い ●

※ 会員皆様で、「住所」や「連絡先電話番号」等に変更が生じましたら、事務局に連絡をお願いします。

「卓話」

～総会終了後に開催しています～

函館文化会では、毎総会後に「卓話」を開催しています。この「卓話」は、総会に集まって議案の審議を終え、それで解散も如何なものか、この機会を活用して著名な方々の話を聞きながら、より会員の絆を深めようと始められたもので、そんな趣旨で開催の「卓話」も今回で19回目を数えました。

今回は、北海道教育大学非常勤講師の根本直樹氏にお願いして、「地域学のみかた・楽しみかた+（プラス）～函館文化会の活動を考えるうえで～」と題し、根本氏がこれまで実践されてきた地域学を踏まえ今後の函館文化会の活動に対する示唆に富んだお話をしていただきました。

なお、卓話でのお話しのポイントを根本氏にまとめていただきましたのでご紹介します。

第19回卓話（令和6年5月28日）

地域学のみかた、楽しみ方^{プラス}+ ～函館文化会の活動を考えるうえで～

北海道教育大学函館校非常勤講師 **根本直樹**



私は大学を退職後に函館文化会へ入会して4年が経過しました。文化会の企画委員を担ってきたことを含めて、いろいろと考えさせられることがありました。本日のテーマは、これまで学んできた地域学から会の運営に何かヒントがあればという発想から生まれたものです。サブタイトルの目的に近づければと思っています。

自己紹介から地域学へ

私の学びと仕事の履歴は、一般的な研究者の道筋とは大きく違っている。大学では最初に考古学を学び、地理学に変更して先史地理学を経験した。就職先が市立函館

博物館で民俗分野を担当し、『函館市史』の編集員で都市史を兼務することになり、両分野とも初めての経験でした。約20年を経過した後に北海道教育大学函館校の公募「地理学」に応募して採用された。

大学側からは、地理学の他に博物館学芸員のコースを担当することと、学生の指導ではまちづくりを重視するように指示があった。このことは、教育大が教員養成から新カリキュラムに変更していた時期だったことが関係している。大学のカリキュラムがこれまでの学問領域から目的領域へと変化が進む中で、地理学から地域学へと専門領域も変化した。この結果、教育実践領域も複合化し地域学とまちづくりと個人的に関心があった教育学との三つの関係性の中で仕事が構築されていきました。

これらの領域において記録にあるものだけで行政の審議委員等を26件、講師対応も44件を数えた。いろいろな計画に参画できたことは、教員として地域貢献を担うことになりました。教育学との関係では附属学校との共同研究とともに附属小学校の校長も4年間経験できた。学校教育の現場に関われたことは夢のようでもあった。仕事として大切なことは、学生との協働による「まちワーク研究室」での実践で、学生主体の実践とともに市民活動との協働も有意義だったと思う。

地域学のみかた

これまで一見、混在したような学びの領域の地域学とはどのような専門領域なのかを私の観点から少し説明したいと思う。地域学の一番の特徴は、身近な歴史においての「歴史学の研究対象を特定の分野に限定しないで、隣接する学問領域との協力関係を大切にする」（福井憲彦『歴史学の現在』2001）という言葉に表象されている。つまり学際的であり、総合的・多様性であるという性格が重視される。

二つ目は地域学と生涯学習との近接性です。生涯学習では、「地域の課題と自分の生活を問い直すことによって、自分が地域で生きる意味を問い直し、地域を変えていく主体となること」（廣瀬隆人『＜ローカルな知＞の可能性—もうひとつの生涯学習を求めて—』2008）の大切さを表わしている。これまでの知識教養型から課題解決型への変容が求められている。

三つ目の特徴は、地域学の対象とする地域が、「実に函館は北海道にして北海道にあらず、内地化して而も内地にあらず、北海道と内地との中間の地」（昭和3年3月2日「函館新聞」）であり、「殆んど島国的状態」（阿部覚冶『大函館論』大正2年）であった。と函館を説明できるような対象領域の多様性です。函館を説明する場合、函館の行政域でもあり、青函圏や道南圏としても対象化できることを意味している。

地域学の大切な要件は、知識化した情報を単に消費するのではなく地域を考える素材にすることで、小さくとも良いので一人一人がまちづくりに参画することが求められていると思う。その経験が自分を考える良い機会にもなるのではないのでしょうか。

函館文化会との出会い

私の函館文化会との出会いは平成20（2008）年に実施された函館文化会創立50周年記念事業の郷土史シンポジウムでした。「歴史から郷土を見出す～現在から未来へ～」というテーマで①郷土史の意義の再発見、②郷土史研究の進化と進展、③郷土史の魅力の普及と関心を高めることを目的に行われ、私の役割はシンポジウムのパネリストの一人として参加した。

シンポジウムの前に「函館文化会の歴史を語る座談会」があった。その中で特に印象に残ったのは、神山茂郎さんの「生涯地味な生活を送りながらコツコツと郷土史の研究・調査をした父のこの仕事をなんらかの形で残したい」との言葉です。この言葉は、「神山茂賞」の発端でもあり、郷土愛を表象していますし、対象としての



学生とのまちワーク研究室での
ペンキ塗りボランティア

郷土を意味している。

安島進さんの「函館郷土文化会と函館教育会とがひとつになる」ことは学際的であり、関輝夫さんの「市民の世論をまとめて、先頭に立って、物事を提言していく」ことは生涯学習的な発言だと思う。つまり、3人の発言は先ほどの地域学の捉え方と類似する内容であることが理解できる。

函館文化会は神山茂賞の贈呈（平成元（1989）年）から郷土史への熱量が増していることが理解できる。記念事業の4年後に発行された沿革史からは、「民間団体である函館文化会は、今後、どのような活動をしていくかが課題である」や関輝夫さんの「文化会独特の活動というものが有るのでないだろうか。皆で探求してもいいと思う」という問いが提示されている（『創立130周年社団法人函館文化会沿革史』2012）。

地域学の楽しみ方

私の卓話のテーマにある+（プラス）とは、まさに関輝夫さんへの応答なのです。ここで留意したいのは、楽しみ方の変容で、具体的には、「である」から「する」ことへの変容を意味している。講演会等の知識を受容する楽しみとともに、ワークショップ等の対話的な実践をする楽しみを受容です。このことを生涯学習では、「社会における学び」から「社会を創る学び」への転換と言っている（佐藤一子『生涯学習と社会参加 おとなが学ぶことの意味』1998）。

私の個人的な関心から言えば、①現代的な地域課題に貢献することから、新しいミュージアム構想への支援や、②多くの市民団体との協働をとおした組織づくりから、函館パブリックアカデミアの創設と支援をイメージしている。このような具体的な実践を会員の方一人一人が考えることが会の活性化につながるのではないのでしょうか。

新しいミュージアムの意味については、「従来の『モノと知識の保管庫』としてのミュージアムの機能だけでは、ミュージアムが社会の共通財産であるということ、多くの人が認識できない。21世紀の社会でミュージアムを機能させるには、民主的な人々の関わりとの仕組みと、コミュニケーション・デザインが必須です」(稲庭彩和『こどもと大人のためのミュージアム思考』2022)との言葉からも市民が創る博物館が志向されている。

函館パブリックアカデミアの具体的な事例として北海

道下川町の「しもかわ学会」がある。ホームページによれば、「地域学『しもかわ学会』は、地域育での実践と地域研究、会員相互の交流を通して、学術的概念の再構築を図るとともに、(中略)新たな地域づくり」を目的に設立されています。地域学の学際的な調査・研究とまちづくりの実践を融合したこれからの地方創生を意図している。

私たちが所属している函館文化会は沿革史からも理解できるように現代的な関心と実践志向の経験知を自負できる。つまり、社会変化に対応した会の活動が求められているのではないのでしょうか。歴史学の新しい潮流のひとつであるパブリックヒストリーは、郷土史の再評価をしている。ただ、そこには単なる過去の回顧を目指すのではなく過去との対話を通じて、現在の現実社会を創造することを忘れてはならないと示唆しているのです。

令和6年度 函館文化会「講演会」を開催します

今年度も函館市中央図書館との共催で「函館文化会講演会」を次のとおり開催します。

今回は、講師に箱館英学研究者で函館国際俳句会会長の井上能孝氏をお迎えし、「もし箱館に黒船が来なかったら～ペリー来航170周年に想うこと～」と題しての講演です。

鎖国政策を敷いていた徳川幕府に対し、マシュー・ペリー提督率いる黒船艦隊が浦賀沖に現れ開国を求めた。日米和親条約の締結により、開港地に選定された箱館を検分するため、ペリー提督が来航したのは安政元年(1854)で、今年度は来航170周年を迎える。

ペリー提督は、目の前の港を眺めながら安全に入港できる広さを持つ良港といえる素晴らしさを気に入り、検分も市中はもとより、箱館山や郊外の亀田や七重浜にも足を伸ばし、また、多くの住民ともふれあいを持ったといわれている。以来、函館は国際都市として発展するとともに、異文化が移入し今日に至るエキゾチックな街並みが形成された。

ペリー来航170周年の節目にあたり、当時に思いを馳せながら「ペリー提督が箱館に残したもの」、また、逆説的に「もし黒船が箱館に来なかったら」について講演する。

- 開催日時 令和6年10月12日(土)
午後1時30分開演(午後1時開場)
 - 会場 函館市中央図書館 視聴覚ホール
(函館市五稜郭町26-1)
 - 定員 150名 入場無料
- ※ 事前の申込不要です。直接会場にお越し下さい。

函館文化会講演会
函館市中央図書館郷土の歴史講座

もし箱館に
黒船が来なかったら
～ペリー来航170周年に想うこと～

講師 井上能孝氏
(箱館英学研究者、函館国際俳句会会長)

日時 令和6年10月12日(土)
午後1時30分～3時30分(午後1時開場)

会場 函館市中央図書館 視聴覚ホール (函館市五稜郭町26番1号)

定員 150名、入場無料(事前申込み不要です。直接会場への申し込み下さい)
中央図書館、保健センター駐車場を利用できますが、混み合うことが予想
されますので、公共交通機関のご利用に協力ください

共催 一般社団法人函館文化会 (函館市東五町51番1号) TEL. 57-1175
函館市中央図書館 (函館市五稜郭町26番1号) TEL. 35-5500
(協定管理: 函館流通センター・マルエー・ペリー・ワーニエ共同事業体)

協力 函館白米協会・函館国際俳句会
写真 函館市中央図書館提供

特集 函館の歴史と文化を語り継ぐ ⑨

～ テーマ「湯の川温泉界限」～

函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化」の伝承に因み、毎年発行する会報に函館の歴史・文化をテーマに取りあげ、会員の皆さんにそのテーマに沿った思いやエピソードなどを綴っていただき後世に残していきたいと、特集「函館の歴史・文化を語り継ぐ」を継続して取り組んでおります。

第9回目を迎える今回のテーマは、“湯の川温泉界限”。北海道三大温泉の一つである湯の川温泉を持ち函館の奥座敷として発展した湯川。湯の川温泉は戊辰戦争時には幕軍の戦士が傷を癒やしたという歴史もあり、住宅街に佇む温泉街は明治・大正ロマンの漂うノスタルジックな雰囲気が魅力ともいわれています。観光客ばかりではなく市民も、路面電車で気軽に出掛け温泉街をぶらりと歩き、歴史スポットを訪ね津軽海峡や松倉川の風情を楽しんでいる姿も見受けられます。そんな“湯の川温泉界限”にまつわる話を6人の会員の皆さんから投稿いただきましたので、ご紹介します。

なお、次号（第87号）第10回のテーマは、平成16年12月に函館市と合併してから20年が経とうとする“旧4町村（戸井町、恵山町、楸法華村、南茅部町）”としました。会員皆さんの思い出やエピソード、「旧4町村」への思いなどをお寄せください。応募の要領等は30ページを参照ください。



湯の川温泉冬灯り



故郷 湯の川に育てられ…

伊部 宗博

新型コロナウイルス感染症の収束により函館でも観光需要の回復が急速に進むなか、観光客

の利用が多い函館山ロープウェイと函館市電停留場など西部地区の施設において、利用者のマナー違反や待ち時間が従来よりも長くなるなど、市民や観光客から苦情が寄せられ「オーバーツーリズム（観光公害）」が顕在化しているようである。

さて、我が街「湯の川」はどうかというと、相も変わらず何とも言えないゆっくりとした時間が流れている。私は湯の川に生まれ育って50年になったが、街の風景も随分と変わり人口も減少、どこの地方都市も抱える少子高齢化社会が容赦なく進み、解決していかなくてはならない問題も山積している状況であると理解している。ただ、この年齢になると、湯の川らしいゆっくりとした時

間が非常に心地良く、住み良い街であると改めて感じている。

「湯の川温泉」の成り立ち

「湯の川」という地名は、定説ではアイヌ語の「ユ・ペツ」が語源であると言われ、ユは温泉をペツは川を意味し、後にやってきた和人がこれを「湯の川」と呼ぶようになったのが始まりとされている。温泉についての伝説で一番古いものは、湯倉神社の由緒に「500年余り前の享徳2年（1453）頃、「一人のきこりが家に帰る途中に小高い丘（現在の湯倉神社）で一休みしているところ、目の下に水溜まりから湯気が盛んに立っているのを見て、近寄って手を入れてみると湧き湯であった。その後、きこりが病気になる腕の関節の痛みがひどくなったとき、その湧き湯で湯治をしたところ程なくして病気が



荘厳な雰囲気湯倉神社御本殿

治まり、お礼に薬師如来像を刻み小さな祠を建てて安置し祀った」とある。

以上は言い伝えであるが、明らかな事実および現存する社宝による明確な由緒がある。松前藩第9世5代藩主高広公が千勝丸といった幼少期、承応2年（1653）に重い病にかかり、医師や薬の甲斐もなく日に日に悪くなっていくある日、母清涼院が夢で「松前の東に当たって、不思議に病に効く温泉がある。そこへ行けば、どんな病も治る」という神のお告げを受けた。早速、家来を向かわせたところ、温泉を発見し千勝丸を湯治させると間もなく全快したとのことだった。翌年の承応3年（1654）、清涼院はお礼に社殿を改造し、道南知内産の砂金で黄金の薬師如来像（約16cm）を安置し、直径約19cmの鰐口を奉納した。爾来、湯倉神社の神威はますます高揚し湯の川温泉も広く世に知られるに至ったと言われている。

「湯の川温泉」のあらまし

明治38年（1905）に函館一小樽間の鉄道が開通し、翌年に札幌、翌40年には旭川まで函館本線の全線が開通した。さらに明治41年には青函連絡船が就航し、函館は名実ともに北海道の玄関口となった。北洋漁業の本拠地だった函館は、大正時代に入ると東北・北海道で最大の都市へと発展し、その「奥座敷」と呼ばれた湯の川も活況を呈していく。温泉宿が立ち並び、商店街が形成され、その中心であった湯の川銀座通りには、商店はもとより、銀行、見番（芸者を取り次ぐ事務所）、書店、団子屋、タクシー会社、映画館、ビアホールが軒を連ねていた。「通りには人が溢れ浴槽には湯が溢れる」とも賑

わいのある街であった。竹葉新葉亭で長きに亘り女将を務められた西野さんに以前お話しを聞いたのだが、かつて湯の川には300人ほどの芸者さんがいて、街のあちこちでお稽古の三味線や鳴り物の音がしていたそうで、夕方になると人力車でお座敷に向かう芸者さんの姿を日常で見ることが出来たそうである。何とも風情のある街ではないか、今でもその情緒が少しでも残っていたのであれば、大きな観光資源の一つになっていたはずである。

現在の湯の川温泉は、津軽海峡に面し、三つの河川、湯の川・松倉川・鮫川が貫流しており、海側を中心に温泉施設が建ち並び、登別温泉、定山溪温泉と共に北海道3大温泉郷のひとつに数えられている。函館空港やJR函館駅、JR新函館北斗駅からのアクセスも優れており、かつては60施設程の温泉旅館、ホテル、保養所や寮などがあったが、現在は本格的な和風旅館や大型ホテルを中心に約20施設、年間利用者130万人程が訪れる函館の観光拠点の重要な役割を果たしている地域である。

コロナ禍における湯の川

新型コロナウイルス感染症によって私たちの生活は一変し、社会に及ぼした影響は計り知れないほどに大きく、経済活動が強く制限される状況となった。「STAY HOME（ステイホーム）」が叫ばれた時期、温泉旅館・ホテルの休館が相次ぎ、真つ暗となった海沿いの町並みを見たときに絶望・失望・失意・無力感、どのような言葉も当てはまらないほどの状況であったと記憶していて、今でも決して忘れることが出来ない。

コロナ禍において神社の運営は、祭礼行事は中止や規模の縮小を余儀なくされたがその反面、神事を継続する重要性や神振行事等による人と人との繋がりの大切さを改めて噛み締めることが出来た。困難な時代だからこそ函館湯の川温泉旅館組合、商店街（湯川商店街振興組合、湯川温泉商工親和会）、そして町会が手を取り合い大同団結して、より良い湯の川を作り上げてもらいたいと強く願っている。地域への感謝の気持ちを込めて、そのお手伝いが少しでも出来るよう私も努力していきたいと考えている。

神社の今後の活動について

当社は本年秋に、皆様の御陰を以って創建370年の大きな節目の年を迎える。日頃の境内の様子も10数年前とは比べものにならないほどの多くの参拝者に参詣頂いて

いる状況にある。これもひとえに神社役員・関係者の格別の御理解があり、氏子崇敬者の皆様の多大なる御協力の賜物と深く感謝申し上げたい。

向後もより多くの参拝者を神社にお迎えし、人々が集い、賑わい、活気に満ちあふれる社頭となるよう、祭祀の厳修と御神徳の発揚に力を尽くし、神事・祭事を通じ

て、日本の伝統文化の素晴らしさを、当社から発信出来るよう努めていく所存である。



いべ むねひろ 昭和48年10月2日函館市生まれ、平成8年3月國學院大學文学部神道学科を卒業、平成8年4月福岡市博多区鎮座櫛田神社に奉職、平成13年4月函館市湯の川鎮座湯倉神社に奉職、平成20年7月湯倉神社宮司を拝名



湯の川温泉界限今昔 ～私のスケッチ～

船矢美幸

北海道地図に「ゆの川村」の名が載るのは元禄13年、西暦1700年で江戸幕府に松前藩が提出した「元禄御国絵図」の中と言われる。

湯川村が町に昇格したのが昭和11年、函館市と合併したのは大火後の14年である。年寄達は十字街や大門に出かけるのに「函館さ行く」と言っていたのを記憶している。

湯川の鎮守として小高い丘に立つ湯倉神社は、医薬、温泉の神様、境内下の地碑に松前藩9代藩主が幼時千勝丸の頃、湯の川の温泉で難病が全快したとの由来が書かれている。この故事にあやかる湯川商店街の「千勝まつり」の賑わいは何年前の事だったろうか。

7月の日曜日、湯の川温泉電停わきの足湯、「湯巡り舞台」に行ってみた。家族連れが3組、若い女性の2人組、ペアが1組。子供達ははしゃいでいる。名古屋、千葉、札幌の方々と美味しい晩ごはんをスマホで検索中。女性達は得意気に名物のお団子を見せてくれた。のんびり足湯に浸かっている二人はマンマーから来たというので、新婚旅行？と訊くと首を振って「介護です。高丘にいます。」と言って人懐っこい笑顔を向けた。しかし咄嗟に判断出来かねた。介護士？外国人にお世話になる時代なのだ、と「またね」と言って別れた。

パチパチの赤い橋の隣の橋、御成橋を渡ると右手に東郵便局があり、幅広く立派に舗装された道が「温泉通り」である。丁度、花びし前から桜橋の竹葉新葉亭までの道、今や湯川温泉のメインストリートだろう。両サイドに美しいしだれ柳とつつじ。外灯は行灯型で、花街らしい粋な雰囲気漂う。

しだれ柳の緑が心を和ませ、安らかな気分。昔、この辺りに芸者さんの見番があった事を思い出す。BGMのように三味線が聞こえた。

今、湯の川温泉旅館協同組合のある場所に湯川消防署があり、市民会館設立の頃、そちらに移転した。二丁目7番6号の地に龍神を祀るお宮があり、子供達は桑や楓の木に登ったり、鳥居の上を歩いたり、肝試しお化け大会で遊んだ。「土場の湯」という浴場があり、塩分より鉄分の多い温泉で、老齢男性が朝一番電車で集合する朝湯会が特色だった。

「昔、千人風呂という有名な温泉があったそうですが、どの辺ですか」と訊ねられる。大正6年創業の千人風呂（湯川ホテル）は客室50室の3階建。残された写真で見ると、高さがあるので一際目立っている。当時日本一の大浴槽があったため、通称千人風呂と呼ばれていた。馬のための風呂があり、全道随一の名所として観光客に喜ばれていた。ヨーロッパにも精通の馬術研究家、事業家で湯川村会議員の続秀太郎の経営で、場所は現在の竹葉新葉亭の辺り。いつ頃廃業したのか壊されたのか知らないが、私はこの廃墟の浴槽の中で近所の子供仲間でもまごと遊びをした。周囲のタイルが壊れていても正方形に絵模様のタイルは美しく、浴槽の中でのまごと遊びは童話の世界。昭和15年頃の思い出、絵模様のタイルに夢が広がる。

大正9年2月、千人風呂（湯川ホテル）で芸妓2人と若い陸軍予備少尉との3人心中事件があった。当時の函館新聞社会面のトップ記事で街の人々は仰天する。

「昨10日の朝、湯川千人風呂3階建西洋室に於ける心中騒ぎ…劇薬モルヒネを吞んで春の一夜を騒がす」

森本貞子著「冬の家」272頁にある。

写真で見る千人風呂は戸外のプールで水着の少年少女が楽しそうである。経営者の方針は健康志向の家族風呂で、花街の粋や情緒ではなかった。今の足湯、湯巡り舞台が体現しているのかも知れない。



湯川・龍吟寺の鳥居と私

龍吟寺には函館大火供養碑があり、湯川地区の人々の温かい心を感じる。須藤隆仙氏が境内に鳥居がある事を珍しいと書いておられるが、子供の時遊んだお宮の鳥居で、柱には昭和2年中野由太郎と刻まれた字が見える。

菩提寺に昭和42年頃寄進された。お稚児さんの行列がありお寺での法要があった。

お宮のあった頃、春と秋にはお祭りがあり、龍王大明神の大幟が立ち、大太鼓が鳴らされた。お赤飯とビスケットが集まった人々に配られた。遠い記憶で何時の頃かよく判らないが、芸者さんを乗せた人力車、その後を箱屋さんが箱を担いで行く。箱に入っているのは三味線。お正月の芸者さんは黒紋付きで島田の髪簪かんざしに初穂が揺れ

ていた。龍神の社がある鳥居の前で必ず頭を垂れていた芸者さん、その仕草が何とも美しく日本舞踊を思わせた。

見番からは撥擲ぼちさばきも激しい三味線合奏ひびきの響、若柳流の厳しいお稽古が垣間見えた。音曲も長唄、清元、常磐津等々習得するのは難しいというのに、一流は何でもこなし、名取り（師匠）である。割烹温泉旅館の女将ともなれば事業家でもある。若い時の苦難を乗り越えた努力の人生に感服である。「芸ひとすじに生きて、その腕前で宴会を盛り上げるのが芸者の役目」と言い切る竹葉の女将や鱗の女将を知っている。

明治・大正・昭和と函館の奥座敷、湯川温泉繁栄に盡力の芸者さん達。百人の時代から三百人の時代もあったとか。平成11年、湯川見番は廃止となり、現在は一人も居ない。三味線の音色は絶え、花街の雰囲気ははだれ柳と行灯の外灯が語るのみとなった。変わって登場は、老人介護施設である。

私事でお恥ずかしいが、昭和30年代に結婚した私は時流のウェディングドレスに抗って、湯倉神社で9月9日挙式、料亭「大和」の披露宴では黒紋付の老練20名勢揃いで清元「青海波」が奏された。札幌から来函の北海道放送アナウンス部長達の感動した様子が嬉しかった。源氏物語で演じられる雅楽曲だが、あの日の清元「青海波」を有り難く思っている。



ふなや みゆき 昭和8年(1933)函館生まれ。北海道教育大学卒業。元北海道放送アナウンサー、現在函館朗読奉仕会朗読研究雪の会代表、国際俳句協会会員、函館日独協会理事のほか(社会福祉法人)共愛会評議員。函館市文化賞受賞。

湯の川温泉界限が賑わったころ

小笠原 勇 人



湯の川の語源は？ 伝説によると、15世紀中頃、ある秋の夕暮れに一人のきこりが枯木を背負って家に帰る途中、一休みしようとして小高い丘（今の湯倉神社のある辺り）に腰を下ろすと、すぐ目の下の水溜りから湯気が立っているのを見て、近寄って手を入れてみると、湧き湯であった。そのきこりがある時、病気になり両腕

の関節が痛くて仕方なくなった時、その湧き湯を思い出して湯治したら、半月くらいで治ったとの事である。そのお礼に薬師如来を刻み、形ばかりのお堂を建てて安置したのが温泉の起こりであり、湯倉神社の起源とも言われている。

またの他の説によると、松前藩九代藩主が幼少の頃、不治の病にかかった際に、母の清涼院が夢のお告げで温泉場所（湯の川）を知ったとも伝えられています。

以来、温泉の恩恵を受け旅館・ホテルが集積した温泉の街、北海道屈指の古湯、函館の奥座敷と称されているわけです。(函館物語より引用)

さて、湯川町とは箱館の端っこに位置した湯川村であった。大正7年、函館市の都市計画区域決定が内閣で認可され、当時の函館の近隣村に銭亀沢村・湯川村・亀田村があり、計画区域とされた。その後、昭和11年湯川村に町政が施行され、函館市湯川町となり、1丁目・2丁目・3丁目と区分されたとされている。

ここで一人の偉人を紹介する。湯川町で繁栄を極めた酒田孫六という人物。当時、湯川町の前浜は豊かではなく漁師の生活も大変だったが、酒田孫六は昆布に目を付け懸命に取り組み、20年の年月を掛けて湯川沖に自費で投石し昆布が根付くようにした。今でいう人工養殖で、その結果が今に通ずる昆布の名産地として発展した。

また、湯の川といえば温泉宿であり、花びしホテルである。数多いホテル・旅館の中でなぜ花びしホテルかというと、小笠原家と花びしホテル(西村家)は先々代の西村敏雄氏(函館市議会議員)・先代の西村憲人氏(函館商工会議所副会長・函館青年会議所第31代理事長)、現在の社長 西村有人氏(函館青年会議所第62代理事長)、そして私の父、小笠原孝は(第17代理事長)、私は第51代理事長として函館発展のために尽力した先輩後輩として馴染み深く、地元のホテルとしても色々と関わりを持っているからである。

私の祖父小笠原亀吉は湯川の芸者さんに馴染みがおり、宴会に招き三味線・踊りを舞っていたのが記憶に残っている。湯の川温泉については旅館・ホテルと共にもてなしの要として芸者さんがおり、温泉街(商店街)の形成にも一役かっていた。芸者さん目当ての髪結・呉服店・履物店・染物屋等が軒を並べ、また旅館・ホテルの御用達としてお茶やお酒の店が繁盛していたようで、今もなお、当時の面影を残している。

当時は芸者見番があり、料理店・芸者屋・待合事務所があり、芸姑の手配や管理行っていて、花柳界の歴史を伝えるものであった。湯と川の街、かつての湯の川境界はホテルや旅館を中心に経済が成り立ち、伝統文化も育まれて行った。日本古来の伝統文化は日本舞踊・長



街角で気軽に温泉気分を味わえる「足湯」

唄・琴・邦楽・民謡や詩吟、さらに華道や茶道などである。湯の川にはホテルや旅館の他にも宿泊施設や寮も沢山あったようで、海上保安庁の潮寮をはじめ、北電やN T Tなどの研修などにも使われて大勢の人が集まる地域であった。また、湯の川温泉街には有力者が多く、町会活動も盛んで地域の経済活動を担っていたと聞いている。

私の自宅は(父・孝)が建てたもので、大黒屋旅館の真向かいにあり、横には松倉川が流れ大黒橋がある。この辺りは清流とは言えないが、秋には鮭が遡上するのを見かけたこともある。松倉川は横津山系袴腰岳に源流を持ち、河畔林や滝の流れの四季折々の変化、可憐な草花や野馬の姿に多くの市民から感動の声が寄せられ、身近にある松倉川の自然の素晴らしさを改めて浮き彫りにしている。上流は湯の沢川であり、途中、湯の川と松倉川が合流して市街地を流れている。地元の間人として一度は上流の散策に分け入ってみたいと常々思い、同好会でもあれば是非参加したいと思っている。

昨今の湯の川は、観光客が以前を超える勢いで増えているようで、夕食後には観光バスが連なって函館山の夜景へと向かって行く。我が家の近くに湯倉神社があり、以前にも増して観光客が多く訪れており、神社にはおみくじや記念になるグッズ類も揃えてあり、一大観光地のようになっている。9月、秋の例大祭ともなれば、商店街の若者が元気に神輿を担ぎ威勢よく盛り上がり大いに賑わうのが湯の川である。



おがさわら はやと 昭和36年函館市生まれ。昭和58年東京経済大学卒業後、西武百貨店を経て地元テーオー小笠原に入社。現在は株式会社ティークラウド代表取締役、一般財団法人小笠原アカデミー教育振興財団理事長。



湯の川の思い出

西村 有人

昭和50年代、私は附属小学校に通っていたため、湯川中学校前のバス停から毎朝バスに乗車

し通学していた。大きなランドセルを背負って、ベレー帽をかぶり、制服を着ていた。家を出発しバス停に着くまで、およそ5分の道のりである。当時は3歳上の姉と一緒にバス停まで歩いていたので、不安はなかった。バス停までの道のり途中で堤商店があった。湯川2丁目界限では知らない人はいない商店である。朝、学校に行くときには閉まっているが、たまにその店のおじさんとおばさんがシャッターを開けて、品出し、商品陳列をしている時がある。そんな時「おはよう」「いってらっしゃい」「気をつけるんだよ」などと言葉をかけてもらうこともあった。

バス停につくと、姉以外に友達や上級生とともにバスが来るのをワイワイ、ガヤガヤしながら待つのである。

帰りのバス停は、ちょうど堤商店の目の前で降りることになる。もちろん店は営業中であり「おかえり!」「勉強してきたかい!」などと言葉をかけてもらいながら、家へと向かうのである。この当時の商店は、常にドアが開いていて、店先にも商品が並んでいるので、通りすがりの人が良く見えるし、一声掛けやすかったであろう。

もちろん私のおやつはいつも堤商店で買っていて、いま思い起こせば何でも売っていて、買い物の仕方を身に着けたのは堤商店であることに気づいた。

今の時代はスーパーやコンビニが主流で、もちろん自動ドアなどでしっかりと店内と店外に隔たりがあり、通りすがりの私に、声を掛けてもらうことなんて、到底体験することができないのである。また、買い物の仕方も変わりつつあり、支払は自動精算機で自ら作業をしなければならない。あるいは、自分でバーコードを通したり、袋に詰めたりするのが当たり前になりつつある。「ありがとうね」「気をつけて帰るんだよ」「お母さんによろしくね」そんな言葉を掛けてくれる店員は皆無である。そ

んなことを思うと、私の小学生時代の堤商店が懐かしく、古き良き時代であったのは間違いない。

産業道路を降りていくと、市電の終点「湯の川電停」がある。電車通り沿いを1丁目に向かって歩いていくと、駄菓子屋さんがあった。歴史ある木造づくりの店構えで、ガラガラガラと鳴る引き戸をあけると、店内はびっしりと一面駄菓子という子供にとっては夢の国であった。百円玉と十円玉を握りしめ、駄菓子を買に行くのが、とても楽しみだった。店に入るとおばさんがいつもやさしく「いらっしゃい」「今日は何にする」と聞いてくれるのが嬉しかった。アタリ、ハズレのくじ付きの駄菓子が好きだったが、ハズレばかり続くと、おまけをしてくれた記憶もある。大人になってもそういう得した記憶、ご恩は忘れないものである。

くじと言えばもう1つ思い出がある。市電の終点の電停をトラピスチヌ方面にさらに200mくらい進むと交差点の一角にたこ焼き「くだおれ」があった。わたしの記憶では、くじを引いて、1個から6個までの○が押印されており、その○の数だけたこ焼きをもらえる仕組みである。くじを引いて5個以上の○が押印されていると、大喜びであった。だいたい2、3個が多かったように記憶している。それでも○が1つの場合もあったが、その時はおじさんがおまけで2個くれるやさしいおじさんで、ここでもご恩をいただいたのである。店主のおじさんは職人気質なイメージで口数はそんなに多くはなかつ



湯倉神社例大祭 浦安の舞

だが、中がトロトロのとてもおいしいたこ焼きで、わたしの初たこ焼きはこの店であり、ここ以上のたこ焼きに、なかなか出会うことがないほど、好きだった。

わたしは高校から函館を離れたので、その後、気づいたときにはたこ焼き屋はなくなっていた。数年前、そのくいだおれがあった向かい側に「塩たこ」という看板を見つけ、吸い込まれるように店に入って、たこ焼きを注文し、1個食べて驚いた。それは30年以上前に私が好きだった、くいだおれたこ焼きの味にそっくりだった2個目を頬張ってみたが、間違いなし・・・あの味だ。確信はしたが、恐る恐るお店の方に尋ねてみた「このたこ焼きって、もしかしたら、昔、お向かいにあったたこ焼き屋さんですか?」「はい、そうです!昔、父が向かい側でやってました」とのご返答。私は、またあのたこ焼きが食べられたことの嬉しさと、何よりも30年以上たった今でも、あの味を覚えていた自分にすごく驚いた。

小学校のころ、最大の楽しみは年に1度の湯倉神社のお祭りである。毎年9月7日から9日までの3日間開催される。大人になってから例大祭ということを知ることになるが、小学生時代は縁日が連なる最高の3日間であった。境内の中から、下の歩道まで、びっしりと縁日のテントが連なり、大勢の人たちで賑わい、法被で御神輿を担ぐ人や氏子の方々、見物する人、縁日を楽しむ人

たちで大賑わいになる雰囲気も大好きな光景である。最終日には餅撒きがあり、大歓声とともに3日間の終わりを告げる瞬間がなんとも言えない楽しさと寂しさが交差するのである。

そんな小学生だった私も今は3女の父で、この数年、娘が例大祭で浦安の舞の巫女としてご奉仕する機会をいただき、また私自身、湯倉神社に関わらせていただけていることに心からの感謝の念と湯倉神社をはじめ、湯の川の歴史と伝統と文化を受け継ぎ、これらかも継承していかなければならないと感じている。

今回は私の小学生時代の記憶を掘り起こし、湯の川の歴史と文化の一端をご紹介します。まだまだ湯の川にはたくさんの素敵な場所、お店、人々がいて、今もなお脈々と伝統を受け継ぎ、継承している。私も、もうすぐ創業80年になる企業を受け継ぎ湯の川温泉とともに歩んでいるところである。これからも湯の川町ならびに湯の川温泉に足をお運びいただけたら幸いです

にしむら ありひと 昭和48年函館市生まれ。帝京大学卒業、花びしホテル代表取締役社長、函館湯の川温泉旅館協同組合副理事長、函館国際観光コンベンション協会副会長など



湯の川温泉の花火大会

大 桃 誠

私は函館で生まれ、高校時代まで湯の川町に住んでいた。函館市立湯川小学校、函館市立湯川中学校そして函館西高等学校へと通っていた。

この学生時代、毎年楽しみにしていた夏の一大イベントが湯の川温泉の花火大会で、大会当日は朝からワクワクしていたのを覚えている。国道ではパレードが行われ、出店がたくさん立ち並び、最後の花火打ち上げまで楽しい長い一日です。

また、献湯御輿に参加し、慣れない御輿を担いで肩を腫らしたことや旅館組合青年部では松倉川の中州に降りて、一つ一つの灯籠に火を灯して灯籠流しを行ったこと

が思い出される。

今では函館の夏の終わりを告げる花火大会として風物詩となっている湯の川の花火大会。現在の名称は「湯の川温泉花火大会」になっているが、第1回から第21回までは「湯の川温泉納涼まつり」、第22回から第46回までが「湯の川温泉いさり火まつり」、第47回から現在の「湯の川温泉花火大会」と名称の変遷を辿る。

来年、令和7年(2025)は記念すべき第60回を迎える節目の年となるが、ここで湯の川温泉の花火大会の歴史に触れてみたいと思う。

・昭和41年(1966)に湯の川温泉をアピールすること

を目的に開催された納涼まつりが「第1回湯の川温泉納涼まつり」で、当時は松倉川河畔を舞台とした灯籠流しや演芸がメインで、花火自体は小規模なものだった。写真コンテストや芸者さんによる踊り、佐々木基晴さんの民謡、地元湯の川中学校の吹奏楽など様々な演芸が披露されていた。

- ・昭和45年（1970）の第5回大会頃から花火がメインとなり地元でも人気上昇してきた。この年の7月1日に市民会館が開館、7月20日に市営熱帯植物園が開園している。
- ・昭和46年（1971）の第6回大会から松倉川河川改修工事に伴い会場を根崎公園グランドラグビー場へ移転し、打ち上げ場所は松倉川河原を使用していた。
- ・昭和50年（1975）の第10回大会では「納涼まつり花電車」が全線昼夜2回運行された。
- ・昭和51年（1976）の第11回大会ではスーパーホリタ（現在のイオン）が開設されることとなり、再び打ち上げ場所を松倉川下流河畔となった。
- ・昭和53年（1978）の第13回大会では湯の川温泉納涼まつりを広く宣伝・告知するため、道南全域に向けて車輻キャンペーンを行った。
- ・昭和58年（1983）の第18回大会からは行事内容を充実させるために開催日程が2日間になった。1日目は温泉献納行列が行われ神輿とともに行進。演芸



函館の夏の終わりを告げる
湯の川温泉街の花火大会

大会では歌謡曲、民謡、コント劇、湯の川見番芸子連舞踊等が上演。最後に花火が打ち上げられた。2日目は納涼祭りパレード、万霊供養法要、灯籠流し、函館巴太鼓、歌謡曲が演奏され、花火が打ち上げられる。年によって仮装行列や陶器市、うまいもの市、湯倉神社でのライブなども行われていた。

- ・以後、内容が年々拡充され、花火の種類も中国花火や水中花火、仕掛け花火やナイアガラの滝など平成20年（2008）の第43回大会まで2日間の開催が続けられていた。
- ・令和元年（2019）には、砂浜にステージを設置してジャズライブを開催し、旅館組合独自で売店を出店。また、個人のお客様や企業のPR向けにメモリアル花火の販売も開始した。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、令和2年・第55回（2020）と令和3年・第56回（2021）は大会を中止せざるを得なかったが、新型コロナも下火となった令和4年（2022）には全国旅館ホテル衛生同業組合連合会青年部の企画で「宿の日花火大会」（第57回）として開催し、昨年令和5年（2022）の第58回から従来の花火大会の形に戻り、開催している。

現在は、花火大会当日に各旅館ホテルから温泉を持ち寄り、湯倉神社にて温泉献湯祭を行うとともに花火大会の安全を祈願していただいている。

湯の川温泉花火大会の醍醐味は、花火を間近で見ることができるといことが魅力の一つです。また、打ち上げ場所付近には旅館ホテルが立ち並んでいるため、湯の川温泉にご宿泊のお客様はお部屋から花火を鑑賞することができます。もちろん、宿泊客だけでなく函館市民はじめ観光客にも楽しんでもらうことができる花火大会で、来年第60回の節目を迎え、今後も継続して開催できるよう邁進してまいります。



おおもも まこと 昭和53年、函館市生まれ。高校まで湯の川在住。函館西高等学校卒業、英国暁星国際大学卒業、東京YMCA国際ホテル専門学校卒業。平成18年（2006）に帰函。竹葉新葉亭へ入社。



街歩きの楽しさ 湯の川三昧

須藤 由司

湯川3丁目に住んで33年…

この湯川地域の便利さ＝飛行機・JR・市電の交通機関、コンビニ・スーパー等の大型量販店での買い物、学校、病院などの利便性、そして、自然の恵み＝湯浜海岸、見晴公園、ご近所の素晴らしい庭などにすっかり馴染み、その住人になって毎日生活をしている。

一方、この地域の歴史＝湯の川温泉や神社仏閣、路面電車など、さらには地域住民の生活を垣間見られる風景＝老舗商店やその跡が点在しているのも、ブラッと街歩きをしている者には大いに嬉しい街でもある。この機会に3に因んで「三題断、にお付き合いください。なお、記述は必ずしも史資料によるものではなく、散策して見聞したことに基づいていることをご理解していただきたい。

【その1…寺町湯川】

我が住む街湯川3丁目には、三つのお寺さんがあり、それらが隣同士や道路1本挟んで接しており、正に寺町の様相である。三寺とは、曹洞宗「雲濤山^{りゅうたんざん} 龍吟寺」、真宗大谷派「明光寺^{めいこうじ}」、浄土宗「龍澤山^{りゅうさくざん} 湯川寺」である。それぞれ由緒あることは承知しているが、詳細については別に委ねることとする。

その一つ湯川寺は、地域に密着した様々な活動を展開し、住民や関係者の集いの場所になっており、今の季節は「夏詣」の幟を掲げている。なお、境内には、函館(津軽)要塞設置のため移設を余儀された元函館山に安置されていた西国33観音が移土されており、函館に居ながらにして巡礼ができるのも嬉しい。ところで、龍吟寺の境内に鳥居があるのだが？また、明光寺には梵鐘があるが除夜の鐘をついているのかな～？

【その2…湯の川＝温泉・銭湯】

“湯の川と言えば温泉”市民は誰もがそう言う。その発祥や歩み、数々の温泉旅館等についてはご存じのことでしょう。ここでは、この地域に密着した“銭湯[公衆浴場]”についてふれてみる。我が家から10分圏内には、

「大盛湯^{たいせいゆ}」(現役)と、既に廃業した「長生湯^{ちやうせいゆ} 山内温泉」(銀月並び)と「福の湯^{ふくのゆ}」(美鈴近く湯倉神社バス停前)の3軒があった。後者の2軒は 家族で何度かお邪魔して湯に浸かったものだ。

湯川町に住み始めた頃には、湯川エリアに7～8軒の銭湯があったが、今では「大盛湯」と熱湯で有名な「永寿湯」の2軒のみが営業。時代の趨勢とはいえ、寂しい限りであり、市内でもその数は激減しているが、未永く続けてほしい。そのためには、地域住民も偶には利用しては如何だろう。

その中「大盛湯」では、銭湯文化の継承やマナー育成のため、銭湯寄席の開催や幼稚園児を招いての入浴体験を実施するなど、大いに奮闘している。スーパー銭湯もいいが、銭湯に足を運び、ゆ(湯)ったりしたいものです。銭湯は、いいですよ。

【その3…湯川の甘味処】

湯川の味自慢は？と問われて、ハタと困ったが、湯川の住人としては甘味ものを紹介したい。全て湯川2丁目、餅とお菓子「銀月^{ぎんげつ}」、菓子ともち「千成堂^{せんなりどう}」、そして既に店を畳んだ「若竹^{わがたけ}」の三軒が有名、もちろん味は太鼓判。

既に廃業して久しい「若竹」は三色だんごが名物で、茶会に和菓子を提供していたとか。今でも「創業明治38年」の看板がひっそりと残っている。今も湯川銀座通りにひっそりと店を構える「千成堂」はべこ餅がお勧めで、毎日元気なお祖母さんが作る逸品だが、少量、限定品のため、早めの予約注文が肝心。



市電と甘味処「銀月」

現役、そして大繁盛しているのが「銀月」。市民はもとより観光客にも知名度が高く、庶民の味。やき団子＝あん・ごま・しょうゆに加え、きなこ(季節限定)は美味で、特にそれぞれの餡の量が半端でなく驚くばかり。湯の川、函館の庶民の銘菓の一つである。

なお、来年、旭川市で全国菓子博覧会が開催されることに関連して、現在、函館の“菓子”関係者が、それらに関わる歴史等を紐解き、まとめようとしているとのこと。開港都市・明治期に起源を持つ老舗や菓子のルーツなどが明かされるのが楽しみである。それにしても、当

地函館での開催で無いのがつくづく残念である。

街の今を紐解くことは楽しい。特に、街の変遷や産業、様々な商店のことなど、身近な“お題”をこれからも探し、探ってみたいものだ…



すどう ゆうじ 昭和29年函館市生まれ。北海道教育大学函館分校卒業。北海道教育大学校園に勤務。東山小学校長で定年退職。(株)北海道通信社参与、清尚学院高等学校長を歴任。現在、北海道教育大学函館校、函館大学非常勤講師。

原稿募集!! 郷土の歴史と文化を語り継ぐ・次回のテーマは“旧4町村”

函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化の伝承」に因み、会報で毎号函館の歴史・文化をテーマとして取り上げ、会員皆さんからテーマに沿った思いやエピソードを綴っていただき、後世に残していきたいと考えております。

10回目を迎える次回の特集「函館の歴史と文化を語り継ぐ」のテーマは、“旧4町村”としました。

平成16年12月、平成の大合併と言われた函館市と戸井町、恵山町、楸法華村、南茅部町の旧4町村が合併してから20年が経ちます。旧4町村それぞれの地域には特産物や特色あふれる観光スポットなどがあり、それぞれの歴史と文化を有しています。例えば、戸井町のたこ、恵山町のツツジ、楸法華村の恵山岬灯台、南茅部町の縄文遺跡や昆布などなど、数え上げればきりがありません。

そんな“旧4町村”にまつわる、会員皆さんの思い出やエピソード、想いなどを次の応募規定によりお寄せください。お待ちしております。



【応募規定】

- 1 “旧4町村”にまつわる思いやエピソード
- 2 文章は原稿用紙6枚程度(2,400字)で、関係する写真1枚の掲載も可能
なお、原稿には趣旨を損ねない程度に手を加えることがあります。
- 3 原稿は、封書、FAX、メール等で令和7年7月31日(木)までに函館文化会へ送付ください。
- 4 出来れば、これまでに寄稿されていない会員の応募をお願いします。
- 5 原稿の送付先、問い合わせは
函館文化会事務局 TEL・FAX 0138-57-1175 E-mail bunkakai@host.or.jp

● 会員を募集しております ●

函館文化会では「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図ることを目的」に活動を続けていますが、この趣旨に賛同いただける方を募集しています。

皆さんの近くに入会いただける方がおられましたら電話、FAX、メールなどで文化会事務局にお知らせいただけませんか。「入会申込書」をお届けいたします。

● 函館文化会の助成制度について ●

函館文化会では、郷土文化振興事業の一環として郷土文化団体が函館市内において開催する講演会、展示会及び芸能発表会などに対し予算の範囲内で助成を行っています。

事業の実施前に申請を受け、審査の上助成の可否決定いたします。詳しくは、文化会事務局にお問い合わせください。

追悼

函館文化会顧問 金山正智氏、池見厚一氏 逝く

函館文化会の役員として永年ご尽力を賜り、役員退任後も顧問としてお力添えをいただいた前会長の金山正智氏が令和6年7月3日に87歳で、また元副会長の池見厚一氏が令和6年5月12日に97歳で、逝去されました。永きにわたり役員として、函館文化会の活動基盤を築き上げてこられたご尽力に感謝申し上げますとともに、お二人のご冥福をお祈りいたします。 合掌



金山正智氏は、国縫中学校を皮切りに教職の道に入り、「国語教育の達人」といわれ、また、課外活動では学生時代からプレーヤーとして活躍したバスケットボールの指導に力を注いでこられました。その後、教育行政に入り平成5年には函館市教育長に就任、退任後は函館市文化・スポーツ振興財団理事長などの要職を歴任し、教育・文化・スポーツに生涯を捧げられました。

函館文化会においては、平成28年に安島進会長の後を引継ぎ会長に就任、野又学園に事務所を移転した後、安島会長が掲げた「“学園”という学びの環境を生かした事業の展開を!!」の実践に取り組み、市民公開講座に一人でも多くの市民が参加できるようにと講座の内容に相応しい会場を探し、競馬場や神社、寺院、消防本部などを借用しいずれも予定を超える参加者になるなど、次の会場探しと講座内容の充実に力を注がれました。

また、懸案だった函館文化会会報に「会報の内容に相応しい愛称を!!」と企画委員会に相談、函館文化会創立140周年迎えた令和3年の第83号から「巴響（はきょう）」と命名しました。巴響は「巴港（函館港）に響き渡ってきた郷土の歴史と文化を受け継ぎ、豊かに伝承する」という函館文化会の取り組みと会報の役割が担うに相応しいものと、自ら会報のタイトル「巴響」を揮毫され今も引き継がれております。

安島前会長の思いを引き継いで、次々に懸案事項の解決に取り組みられ、新時代における函館文化会の望ましいあり方に道筋を築かれた金山顧問の熱い思いを、引き継いでいかなければなりません。



池見厚一氏は、戦後間もない昭和22年の混乱期に20歳で祖父とともに近藤商會を創業され、昭和41年には函館青年会議所理事長に就任し、以後地元経済界はもとより各団体の要職を歴任されてきました。函館文化会では、昭和63年に理事、平成6年には副会長に就任し、平成27年、当時文化会事務局があった函館厚生院の看護専門学校が移転改築するため移転退去を求められた際に、当時の安島進会長と移転先探しに奔走され、一時は函館文化会の解散も視野に入れるなど窮地に落ち込んだものの、野又学園の野又肇学園長のご配慮もあって函館大学に居を構えることが出来ました。移転が決まった時の安島会長、池見副会長の姿には函館文化会の存亡危機を救うことが出来たという安堵感が漂っておりました。

という安堵感が漂っておりました。

平成30年に副会長を退任後は、顧問として理事会にも出席され、貴重なご意見をいただきましたが、社内でも「今日は函館文化会の会議だから」と楽しそうに出かけていく姿には、函館文化会への強い思いが感じられたといわれております。

函館文化会の会員となった昭和57年以降半世紀余り、理事や副会長として文化会の運営に携わり、副会長退任後も「函館文化会を失くしてはならない」と常々に口にしていた池見顧問の強い思いは引き継いでいかなければならないものと考えております。

(編集子)

特別寄稿

ペリー提督箱館来航170周年



函館日米協会会長 中野 晋

1853年ペリー提督の日本への来航を契機とし、翌1854年に我が国日本は日米和親条約を締結し、215年続いた鎖国を終わらせ開国へ舵をきった。この年、函館は静岡県の下田と共に補給港として開港が決まった為、ペリー提督は事前の調査の為に1854年5月17日（嘉永7年4月21日）に5隻の艦船率いて箱館に来航した。箱館の滞在は18日間に及び、松前藩との交渉のほか水や欠乏品の補給、湾内の測量・海図の作成、地引網を使った魚介類の調査、気象・鉱物・植物など市内調査が行われ、6月3日に函館を出港した。その後、1858年の日米修好通商条約の締結により、翌1859年函館は横浜、長崎などととも日本最初の国際貿易港として海外に門戸を開いた。函館では西洋文明が開き、異国情緒豊かな開港場の礎が築かれた。現在、函館はこの開港の歴史を背景に、今も多くの欧米文化を残し、異国情緒豊かな成熟した観光都市として大きく発展している。

今年2024年はペリー提督箱館来航170周年の節目の年を迎え、我々函館日米協会はペリー提督が上陸した5月17日を記念して170周年記念事業を実施した。この日の午前中は生憎の雨だったが、9時半から外国人墓地において墓前祭を執り行い、墓地には、ペリー提督来航時に病気で亡くなられた2名のヴァンダリア号隊員、ジェイムス・G・ウォルフ氏（50歳）とG・W・レミック氏（19歳）が埋葬されている。余談だが、これをきっかけに1870年に函館の5か国の領事と協定書が交わされ、開港後の函館で亡くなった外国人はこの外国人墓地に埋葬されるようになったのである。小雨の降る中、函館日米協会の役員、在札幌総領事館マーク・ウエルベス総領事、米国大使館広報・文化交流担当フィリップ・ロスキャンプ公使、在日米海軍司令部副司令官兼参謀長ラフィ・ファクンド海軍大佐、米海軍掃海艇ウォリアーのロバート・スクワイアズ艦長他10名ほどの米艦乗組員の参列の元、日本キリスト教団函館協会松本紳一郎牧師による祈祷のお祈りを捧げていただいた。170年の時を超え、遠く異国の地に

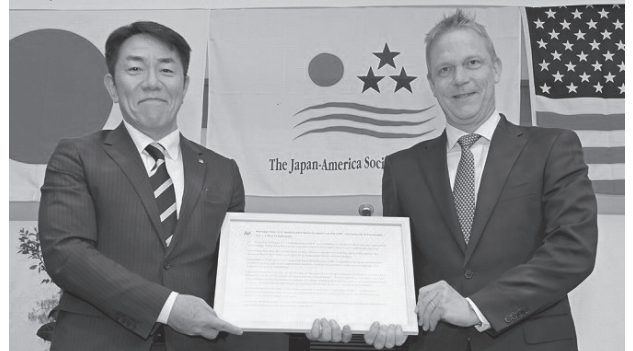
眠るお二人のご冥福をご参列の皆様と共に祈りさせていただきました。その後、2名の墓前に来賓の方々と共に献花を捧げた。そして函館日米協会の会員であり米国フィラデルフィア在住の米国ニューマン大学准教授、音楽博士の石田雪子氏による讃美歌「アメイジング・グレイス」の歌声で墓前祭に花を添えて頂き、閉式とした。

その後10時半からは、会場をペリー提督像のあるペリー広場に移し、墓前祭と同じメンバーで記念式典を執り行った。雨脚が強くなる中、石田雪子氏による日米両国国歌斉唱の後、会を代表しての私の式辞、ウエルベス総領事による祝辞の後、ペリー提督像の足元に献花を捧げて閉式とした。

そして12時半からは会場を函館国際ホテルに移し、45名の参加で祝賀会を開催した。祝賀会でも、石田雪子会員による日米両国国歌斉唱で始まり、私の主催者挨拶の後、在札幌米国総領事館マーク・ウエルベス総領事と函館市大泉潤市長の祝辞に加え、ラーム・エマニュエル駐日米国大使からの祝辞をフィリップ・ロスキャンプ公使が代読して頂き、メッセージ文書は額縁に入れて贈呈していただいた。余興のジャズコンサートなどの後、盛会のうちに祝賀会を終えることが出来た。

振り返ると、私個人としては、1995年に米国留学から戻り五稜郭タワーに入社した直後から、米国への恩返しのつもりで函館日米協会のお手伝いをするようになり、今年で30年目となる。入会当時は、大文堂外国語スクー

一 提督箱館来航170周年記



ルの故渡邊晃氏が専務理事を務めており、米国空軍バンドとの交流など、当時のほうが現在より多くの事業やイベントの企画運営に携わっていた。忙しさのあまり愚痴をこぼすと、渡邊晃氏から、「この程度の忙しさで弱音を吐いていたら、ろくな大人にならないよ。若いうちに忙しく動いて、もっと沢山苦勞しておきなさい」と言われたことを今も時々思いだす。その教えのお陰で、自分も成長させていただいたと感謝している。

その後、函館日米協会は、2001年に函館ロータリークラブ・函館北斗ライオンズクラブと協力して、当時の函館日米協会副会長だった加藤清郎氏（前函館日米協会会長）が中心となり、2004年のペリー提督箱館来航150周年に向けて「ペリー提督来航記念碑建立協議会」を立上げた。当初は800万円の事業費で胸像を建てる計画だったが、話し合いを進めるうちに、よりインパクトのある立像（全身像）へと夢が膨らんだ。当時は、ペリー提督の全身像は、ペリー提督の生まれ故郷の米国ロードアイランド州ニューポート市に唯一存在していただけだった。その後、函館市と日本馬主協会連合会からの資金援助が

決まり、2002年遂に旧函館病院跡地に世界で2つ目となるペリー提督の全身像を建立した。

そして2004年にはペリー提督来航150周年記念事業を盛大に執り行い、旧函館病院跡地を「ペリー広場」と函館日米協会が命名した。2014年には160周年の記念事業も同じく執り行い、そして本年の170周年を迎えた。

我々函館日米協会としては、両国が過去の国家間の衝突を乗り越えて築き上げた日米の市民レベルの友好親善はかけがえのないものであり、今後も大切に行かなければならないと考えている。また同時に函館発展のきっかけとなったペリー提督来航の歴史とその重要性を広く多くの皆様に継承すべく、引き続き努力してまいりたい。



なかの すずむ 1965年東京都小平市生まれ。函館東高校卒。米国ペンシルベニア州立イールト・ストラウズバーグ大学卒。1995年五稜郭タワー(株)に入社。2014年より専務取締役、現在函館日米協会会長

函館日米協会

昭和35年（1960）に設立、一時活動を停止していたが平成3年（1991）有志で再発足し、駐日大使等を招聘しての講演会やシンポジウムの開催、ピアノやヴァイオリンコンサートの開催など活発な活動を展開。また、在米国総領事館などから入手した「米国歴代函館領事が本国に送った書簡」を翻訳し、「箱館開化と米国領事」は難解な資料を解説され、郷土の歴史資料として後世に残る貴重なものと評価され、函館文化会から平成6年「**神山茂賞**」を受賞している。

本年、ペリー提督箱館来航170周年を迎え、これまで日米の市民レベルの交流を築いてこられた会長の中野晋氏から来航170年の思いを寄せていただきました。

特別寄稿



50年ほど前、国連が「1975年は国際婦人年とする」と決定して以降、全国各地の女性達は多種多様な活動を始めているようだ… 」というニュースが、函館に住む私たちのところにも届きました。

私は関西出身ですが、結婚後、夫の仕事の関係から函館で暮らし始めました。まもなく新聞で「道南女性史研究会発足！」との記事を目にして「参加したい！」と強く思いました。

道南女性史のこと・・・

道南女性史研究会、代表 **酒井 嘉子**

しかし、幼い子供達を抱え、働いている夫に頼むことも出来ず、また、預ける親類縁者もない中で「連れて行こう！」と決心し、次女を背負い長女の手を引いて、バスに乗って参加させてもらいました。

居並ぶ十数人の先輩たちに、大阪弁を話す私は温かく歓迎され、泣き出した次女のおしめまで交換していただくなどとても感動したことを、今も感謝と共に思い出します。



道南女性史の掘り起こしを進める主婦たち
(昭和52年8月9日付け 北海道新聞掲載)

この研究会では、函館弁の発言が自由に飛びかい、私は函館弁がよく分からないながらも、初めて聞く興味深い数々の話題に強く惹かれました。

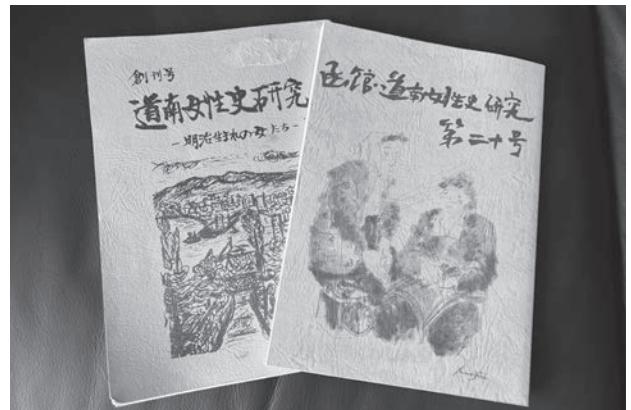
神戸の大学西洋史学科を卒業した私は、フランスのパリ市民層の状況を調べ上げ、「旧制度(アンシャン・レジーム)下の、パリの市民たちの状況」と題した卒業論文を提出したことを思い出しました。「函館の人たち、市民、特に女性たちは、どのように暮らし、どのような事に興味を抱いているのだろうか?」、そういう気持ちでおりました時に、チャンスが届いたのです。友人から、縁のつながる女性を紹介された私は「聞き書き」を始めました。

その女性は、丸町キンさん。戦争で夫を亡くされ、以降40年余りを電話交換手として働き通した女性でした。「時には辞めざるを得ない状況になって、その度に退職金も貰っておりましたので、定年退職時に頂いた退職金は僅かなものでした」と話されたことが、今も記憶に残っています。お会いして間もなく「戦地から帰国された戦友から“ご主人の遺骨です”と、小箱に入った“お骨”を届けていただきましたが、夫のものかどうか - 」と話されたことも記憶に残っています。今思いますと、「函

館のレッド・パーズ事件は激しく戦われ、女性達もレッド・パーズ事件で大きな役割を担ったことについて、どうしてお聞きしなかったのかと、いまでも悔やんでいる……。

もうお一方は、河口キワさん。北海道広報課が発行している誌上で「思いでの島・択捉島」という彼女の顔写真と文章を拝見し、私の属する会のメンバーの知人であったことから、聞き取りを承諾され何うことになりました。択捉島出身の河口さんは、高齢の方と見受けられましたが、入院患者の介護をする仕事場に何うと「休憩時間に屋上でお話しします」と言われ、自分の迂闊さにハッとさせられたこと、「今度は何か本を貸してください。小説じゃなく、苦勞してきた人の体験談みたいなものが読みたい。今は、新聞紙のしわを伸ばして拾い読みしています」と言われたことを思い出します。

最終号「函館・道南女性史研究 第二十号」まで、私の記憶に残る女性二人を紹介して、ペンを置きます。



「道南女性史研究」創刊号と最終号(20号)



さかい よしこ 昭和17年大阪府下生まれ。神戸大学文学部史学科(西洋史学)卒業後、夫の住む函館に移住。昭和50年の国際婦人年を契機に誕生した「道南女性史研究会」に参加し、代表を務める

道南女性史研究会

昭和50年(1975)の国際婦人年をきっかけに、函館市公民館に集まった主婦14人が「とにかく埋もれがちな女たちの生き様にスポットを!」と「道南女性史研究会」を結成。昭和52年に「道南女性史研究-明治生まれの女性たち-」と題し創刊号を発行、資料の少ない中で当時の関係者を丹念に尋ね資料や証言を集めての刊行で、道南女性史研究の突破口を開くものとして評価され、函館文化会から平成元年(1989)に「神山茂奨励賞」、同7年(1995)に「神山茂賞」を受賞している。

その後、半世紀にわたり研究を続けてきたが、会員の減少などを理由に令和6年(2024)5月発行の「道南女性史研究第20号」を最後に活動に終止符を打った。代表の酒井嘉子氏から当時の思いを寄せていただきました。

特別寄稿

函館・「常盤町」の変遷と大石の松

古野 柳太郎



「常盤町」の変遷

「常盤町」は、現在の函館市西部地区にはないが、江戸時代から明治時代にかけてはあった

町名である。

江戸時代の安政2年「箱館港市街地図」（源則房）と、安政4年「箱館夜話草」（淡齋如水）、そして文久2年「箱館真景絵図」（城崎誠輔）に常盤町の町名があり、また、明治2年9月の開拓使出張所の調査によれば、町及び町に準ずるものが53あり、その中にも常盤町の町名がある。

明治4年9月の大火後の市街地区画設定では「常盤町東側」と「常盤町西側」に二分割され、それぞれ町名扱いになっていた。明治9年9月の市街地区画改編にもそのまま踏襲され、明治11年7月の渡島国亀田郡函館区別町名表には「壹小区常盤町東側」と「二小区常盤町西側」の記載があったが、明治12年7月の郡区編成法実施に伴い、大字・小字の区画を廃止し、町の分合が実施された。その結果、常盤町は三分割され、旅籠町・天神町・船見町に組み込まれ、これにより常盤町の町名が消滅してしまった。

その後、函館は船舶による物流が飛躍的に増加し、港湾埋立地と石積岸壁が増え、各種倉庫が増設された。港湾機能が充実すると、関係官庁や関連業種・業者が利便性のすぐれた臨港地区や隣接する平坦地域に集積し、函館市の政治・経済の中心地が形成された。そして地の利を得た蓬莱町界隈が花柳界盛況処となった。

大石の松

弥生坂の西隣の坂を常盤坂という。江戸時代文化年間の初め、やま八印大石忠次郎が南部より来箱して、この坂の上・山ノ上町に屋敷を建て、隣に天神様を祀った。享和3年、山ノ上町に遊女屋が官許され、19軒の料理茶屋（遊女屋兼業）ができ、その4年後には22軒に増えた。旅籠屋・料理屋などが次々と店を開き、「遊女町 山上町 其地也」と紹介され、山ノ上遊郭と呼ばれた。遊女が逝

去すると地藏寺（船見町）に葬られ、遊女屋旦那衆により供養塔（石造、9尺）が建立された。

大石忠次郎はここに芝居小屋を建て、坂東秀右衛門を座元として狂言を興行し、多くの人々に娯楽を提供した。大相撲の巡業も受け入れ、「山ノ上町は惣じて天神様の通りより芝居町この辺まで」を歓楽街とし、連日賑わっていた。

大石の屋敷には松の木があった。奥州南部（岩手県）の名木「義経腰掛けの松」の実生苗を植えたとの言い伝えがあり、樹高3間（約5.4間）、幹回り9尺（約2.7間）、枝や葉が繁って東西17間（約30間）、南北15間（約27間）にもなった。

坂の最上部に大きくて枝ぶりの見事な松が望め、人々から函館の名木といわれた。松は年中緑を絶やさないで、縁起がよい木として、常盤の木と称されていた。この松に因んで常盤町や常盤坂と呼ばれるようになったのである。

この山ノ上町には芝居小屋から芝居町という町名も生まれ、坂は「芝居町の坂」とも呼ばれた。なお、明治11年12月芝居小屋は失火により焼失したため、芝居小屋の興行は蓬莱町の蓬莱座に移して興行された。さらに大石が祀った天神様から天神町の町名も生まれ、また、美しい花畠を作ったので、花谷（はなや）町の町名も生まれた。

明治9年の山ノ上町の地籍を調べると、大石名義の地所が5区画記載されていて、この地域には石段の高さを



「大石の松」（函館市中央図書館所蔵）



旧函館図書館前庭にある大石の松（二世木）

水平に揃えて積み、横目地が一直線になる積み方の整層積、石の寸法の様々なものをうまく組み合わせて積み積み方の乱層積、さらに亀の甲らのように六角形に加工した石を使った積み方の亀甲積の石垣のほか、常盤坂から山ノ上町に至る石段、幸坂から山ノ上町に至る石段（荷馬車や大八車の往来に便利な車道も併設）が、現在もそ

のまま残っている。

大石の松（二世木）

大石の松は明治12年12月6日の堀江町大火（32か町へ延焼、2326戸が焼失）で焼失してしまったが、この松の種から実生苗が育てられ、函館公園の旧函館図書館前庭に植えられた。それは大石の松（二世木）と言われ、今でも生長を続けている。

平成10年の渡島支庁経済部林務課の調査によれば、樹種アカマツ、樹齢100年以上（推定）、幹回り135㎝、樹高4.6mあり、「大石の松」の名札が掲げられている。なお、焼失前の大石の松の写真は函館市中央図書館に保存されている。



ふるの りゅうたろう 昭和12年函館市生まれ。北海道学芸大学函館分校卒業。室蘭市、函館市、八雲町など2市4町10小・中学校に勤務。平成10年退職

函館文化会への図書等の寄贈

会報「巴響」第85号の発行（令和5年11月）以降、函館文化会に次の図書の寄贈がありました。寄贈いただきました皆様に感謝申し上げます。なお、図書等は函館文化会に大切に保存しておりますので、閲覧を希望される方は申し出下さい。

- ・「温故知新」（毎月）（発行 七飯町郷土史研究会）
- ・「日刊政経 2024年・新年特集号、夏季特集号」（発行 日刊政経情報社）
- ・「日本の歴史26巻 別巻5冊」（著者 井上 光貞）
- ・「日本の詩歌 島崎 藤村」（著者 井上 光貞）
- ・「令和5年度（2023年度）第21回 青春海峡文学賞作品集録」（発行 北海道高等学校文化連盟道南支部文芸専門部）
- ・「函館パノラマ写真の系譜」（発行 箱館写真の会）
- ・「湯の川歴史読本 ほか1冊」（発行 函館湯の川温泉旅館協同組合）
- ・「函館・道南女性史研究 第二十号」（発行 道南女性史研究会）
- ・「kanto カント 第6号」（発行 北海道高文連道南支部文芸専門部）
- ・「函館市民文芸 第63集」（発行 函館市中央図書館）
- ・「函館大学論究 第55輯 第1号・第2号」（発行 学校法人野又学園 函館大学）

● 次回の「市民公開講座」は3月を予定 ●

第14回市民公開講座は、「郷土の歴史と文化」をテーマに3月中旬の開講を予定しております。

開講日時、講座の内容、講師等決定次第改めて会員皆様にお知らせいたします。ご期待下さい。

● 令和6年神山茂賞贈呈式を開催します ●

令和6年神山茂賞の贈呈式を次により開催を予定しております。詳細は、改めてお知らせいたします。

日時 11月7日（木）午後4時30分
会場 函館国際ホテル

● 函館文化会事務局からのお知らせ ●

※ 事務局長が交代しました

6月1日付けで事務局長「梅田誠治」から「木村拓美」に交代しましたので、お知らせいたします。これまで同様よろしくお願いたします。

会務報告

令和5年度 函館文化会 事業報告及び収支決算

5月28日に開催された令和6年度定時総会において、令和5年度函館文化会事業報告及び収支決算が承認されましたので、その内容についてお知らせいたします。なお、事業報告、収支決算等についてのお問い合わせ及びご意見、ご要望がありましたら事務局にお寄せください。

令和5年度 事業報告

1 郷土の文化を掲揚し、その振興を図るため、次の事業を実施した

(1) 「神山茂賞」贈呈式の開催

- ・日 時 11月7日(火) 午後4時30分
- ・会 場 函館国際ホテル
- ・受賞者 神山茂賞 中尾 仁彦氏
贈呈式後、受賞記念講演及び受賞者を囲み祝賀会を開催
- ・受賞記念講演
演題：100年後も「函館って、いいよね」と言われたいから

(2) 講演会の開催

- ・日 時 10月14日(土) 午後1時30分
- ・会 場 函館市中央図書館 視聴覚ホール
- ・演 題 アイヌ文化と函館
～馬場・児玉コレクションから紐とく～
- ・講 師 中村 和之氏(函館大学 商学部教授)
※講演会参加者には函館市北方民族資料館特別入場券を配布

(3) 第11回「市民公開講座」の開催

- ・日 時 9月1日(金) 午後1時30分
- ・会 場 函館市亀田交流プラザ
- ・演 題 函館市・亀田市合併50年 昔の亀田
古写真で探訪(タイムスリップ)
- ・講 師 山田 雄一氏(NPO箱館写真の会会員)

(4) 第12回「市民公開講座」の開催

- ・日 時 令和6年3月15日(金) 午後1時30分
- ・会 場 函館市熱帯植物園
- ・演 題 湯の川温泉の魅力を語る
- ・講 師 鈴木 一郎氏(函館市熱帯植物園園長)

(5) 第18回「卓話」の開催

- ・日 時 5月29日(金) 定時総会終了後
- ・会 場 フォーポイントバイシェラトン函館
- ・演 題 開国の先駆者「榎本武揚の点描」に寄せて

- ・講 師 根津 静江氏(函館ゾンタクラブ創立メンバー、函館俳句協会会員、現代俳句協会会員)

(6) 会報の発行

- ・会報「巴響」第85号を11月1日発行

2 文化活動を行う団体・個人への後援・協賛助成事業を実施した

(1) 後援事業

- *函館朗読紀行vol.17『坂の上の対話～函館水上警察より 高城高 作』～若き日の鷗外と歩く
明治15年の函館 7月20日 函館朗読奉仕会
- *第67回北海道奎星会書道展覧会 8月3日～8月8日 北海道奎星会
- *第21回青春海峡文学賞 8月26日
北海道高等学校文化連盟道南支部文芸専門部
- *第99回赤光社美術展 10月18日～10月23日
赤光社美術協会
- *「古典の日」朗読会「泰平の世のお楽しみ～江戸文学を読む」11月2日 函館朗読奉仕会
- *映画「ヒゲの校長」上映会 11月23日
函館聴覚障がい者協会
- *第48回「小さな親切」作文コンクール 12月15日
「小さな親切」運動函館支部

以 上 7 事業

(2) 協賛・助成事業

- *函館朗読紀行『坂の上の対話～函館水上警察より』朗読会
- *第21回青春海峡文学賞
北海道高等学校文化連盟道南支部文芸専門部
- *第99回赤光社美術展
- *第48回「小さな親切」作文コンクール
- *書籍「道南の人・唄・風土ー語りつぎたい在郷魂」
著者 館 和夫氏

以 上 5 事業

3 会 議

(1) 総 会

- ア 定時総会 5月29日(月)
於：フォーポイントバイシェラトン函館
(議 題)

- (ア) 議案
- ・令和4年度事業報告について 承認
 - ・令和4年度収支決算及び監査報告について 承認
 - ・役員（理事・監事）の選任について 選任

- (イ) 報告
- ・令和4年度収支補正予算について 了承
 - ・令和5年度事業計画について 了承
 - ・令和5年度収支予算について 了承

(2) 理事会

ア 第1回理事会 5月29日（月）

於：フォーポイントバイシェラトン函館

（議題）

(ア) 協議事項

- ・令和5年度定時総会提出議案について 承認
- ・神山茂賞選考委員会委員の選任について 承認
- ・会員の異動（退会）について 承認

(イ) 報告

- ・今後の日程について 了承

イ 第2回理事会 9月26日（火）

於：函館大学 大会議室

（議題）

(ア) 協議事項

- ・令和5年「神山茂賞」について 承認
- ・会員の異動（入会・退会）について 承認

(イ) 報告

- ・講演会の開催について 了承
- ・会長、副会長、常務理事の職務執行状況について 了承
- ・今後の日程について 了承

ウ 第3回理事会 1月30日（火）

於：函館大学 大会議室

（議題）

(ア) 報告

- ・令和5年度事業実施状況及び予算執行状況について 了承
- ・令和5年度市民公開講座の開催について 了承

(イ) 協議事項

- ・令和6年度事業について 承認
- ・会員の異動（入会・退会）について 承認

エ 第4回理事会 3月27日（水）

於：函館国際ホテル

（議題）

(ア) 協議事項

- ・令和5年度収支補正予算（案）について 承認
- ・令和6年度実施事業（案）について 承認
- ・令和6年度収支予算（案）について 承認
- ・会員の異動（入会・退会）について 承認
- ・「講演会」及び「卓話」について 承認

(イ) 報告

- ・会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告について 了承
- ・任期満了に伴う役員の選任について 了承
- ・今後の日程について 了承

(3) 諸会議

ア 神山茂賞選考委員会

令和5年神山茂賞受賞候補者として推薦があったものを、6月27日（火）及び8月28日（月）に選考委員会を開催し、慎重な審議の結果「神山茂賞」として中尾仁彦氏を受賞候補者として答申した。

イ 企画委員会

函館文化会が実施する事業の企画・立案に携わるとともに、その開催・運営にあたっている。本年度の委員会の開催日数はこれまで13回（持ち回り委員会を含む）で、実施・担当した主な事業は次のとおりである。

- ・函館文化会の実施する事業の企画・立案・策定
- ・講演会、市民公開講座、卓話の講師・演題等の協議及び運営
- ・「後援名義使用申請」及び「助成金交付申請」の審査

4 その他

(1) 函館文化会ホームページの運営

函館文化会の知名度の向上と事業活動推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び開催、報告などの情報をインターネットを通じて会員はもとより全国・世界に発信することを目的に平成29年4月1日に函館文化会ホームページを開設し、運営を行っている。（アドレス、<http://hakodate-bunkakai.com/>）

● 企画広報委員会委員交代のお知らせ ●

函館文化会が実施する事業の企画・運営は、従前の「企画委員会」から「企画広報委員会」に名称を改め、現在5名の委員（理事2名、会員3名）が担当しています。今年度から、次の方々を委嘱いたしました。

山本 真也、中野 晋、根本 直樹、
小山 直子、丸藤 競

令和5年度 函館文化会 収支決算書

(単位：円)

| 科 目 | 予算現額 | 決算額 | 対予算比 | 備 考 |
|------------|-----------|-----------|----------|-----|
| I 事業活動収支の部 | | | | |
| 1 事業活動収入 | | | | |
| 基本財産運用収入 | 5,264,000 | 5,311,700 | △ 47,700 | |
| 会 費 収 入 | 302,000 | 302,000 | 0 | |
| 事 業 収 入 | 24,000 | 25,200 | △ 1,200 | |
| 受取負担金 | 204,000 | 204,000 | 0 | |
| 助成金収入 | 120,000 | 120,000 | 0 | |
| 雑 収 入 | 1,000 | 203 | 797 | |
| 事業活動収入計 | 5,915,000 | 5,963,103 | △ 48,103 | |
| 2 事業活動支出 | | | | |
| (1) 事業費支出 | 3,716,000 | 3,705,927 | 10,073 | |
| ①文化振興事業 | 3,046,000 | 3,036,500 | 9,500 | |
| 事務手当 | 1,374,000 | 1,374,000 | 0 | |
| 顕 彰 費 | 100,000 | 100,000 | 0 | |
| 会 議 費 | 606,000 | 605,451 | 549 | |
| 旅費交通費 | 81,000 | 71,000 | 10,000 | |
| 通信運搬費 | 158,000 | 154,864 | 3,136 | |
| 消耗品費 | 93,000 | 96,882 | △ 3,882 | |
| 印刷製本費 | 263,000 | 263,340 | △ 340 | |
| 委 託 料 | 20,000 | 20,000 | 0 | |
| 賃 借 料 | 47,000 | 47,520 | △ 520 | |
| 諸 謝 金 | 157,000 | 156,644 | 356 | |
| 助成金 | 60,000 | 60,000 | 0 | |
| 負 担 金 | 76,000 | 75,500 | 500 | |
| 雑 費 | 11,000 | 11,299 | △ 299 | |
| ②土地賃貸事業 | 670,000 | 669,427 | 573 | |
| 事務手当 | 225,000 | 225,000 | 0 | |
| 通信運搬費 | 5,000 | 4,408 | 592 | |
| 租 税 公 課 | 376,000 | 376,100 | △ 100 | |
| 委 託 料 | 49,000 | 48,720 | 280 | |
| 雑 費 | 15,000 | 15,199 | △ 199 | |
| (2) 管理費支出 | 1,644,000 | 1,627,821 | 16,179 | |
| 事務手当 | 704,000 | 703,500 | 500 | |
| 会 議 費 | 168,000 | 148,010 | 19,990 | |
| 旅費交通費 | 80,000 | 90,000 | △ 10,000 | |
| 通信運搬費 | 119,000 | 116,025 | 2,975 | |
| 什器備品費 | 10,000 | 10,186 | △ 186 | |
| 消耗品費 | 85,000 | 81,032 | 3,968 | |
| 修理修繕費 | 5,000 | 5,500 | △ 500 | |
| 印刷製本費 | 74,000 | 74,580 | △ 580 | |
| 委 託 料 | 143,000 | 143,000 | 0 | |
| 賃 借 料 | 246,000 | 246,016 | △ 16 | |
| 負 担 金 | 5,000 | 5,000 | 0 | |

| 科 目 | 予算現額 | 決算額 | 対予算比 | 備 考 |
|-------------------|-----------|-----------|----------|-----|
| 雑 費 | 5,000 | 4,972 | 28 | |
| (3) 法人税、住民税及び事業税 | 426,000 | 425,500 | 500 | |
| 法人税、住民税及び事業税 | 426,000 | 425,500 | 500 | |
| 事業活動支出計 | 5,786,000 | 5,759,248 | 26,752 | |
| 事業活動収支差額 | 129,000 | 203,855 | △ 74,855 | |
| II 投資活動収支の部 | | | | |
| 1 投資活動収入 | | | | |
| 特定預金取崩収入 | 300,000 | 300,000 | 0 | |
| 神山茂顕彰積立金取崩収入 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 事業運営調整資金積立金取崩収入 | 100,000 | 100,000 | 0 | |
| 特定預金借受収入 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 事業運営調整資金積立金借受収入 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 投資活動収入計 | 500,000 | 500,000 | 0 | |
| 2 投資活動支出 | | | | |
| 特定預金繰入支出 | 400,000 | 400,000 | 0 | |
| 事業運営調整資金積立金繰入支出 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 創立150年記念事業積立金繰入支出 | 100,000 | 100,000 | 0 | |
| 退職給与引当金繰入支出 | 100,000 | 100,000 | 0 | |
| 特定預金返済支出 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 事業運営調整資金積立金返済支出 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 投資活動支出計 | 600,000 | 600,000 | 0 | |
| 投資活動収支差額 | 100,000 | 100,000 | 0 | |
| 当期収支差額 | 29,000 | 103,855 | △ 74,855 | |
| 前期繰越収支差額 | 313,000 | 313,746 | △ 746 | |
| 次期繰越収支差額 | 342,000 | 417,601 | △ 75,601 | |

〔注記事項〕

- ・「予算現額」は、令和5年度第4回理事会（令和6年3月27日）で議決した収支補正予算後の額。
- ・II投資活動収支の部 1投資活動収入 特定預金取崩収入は、次のとおりである。
「神山茂顕彰積立金取崩収入」は、「同積立金の内200,000円」を取り崩し、「I事業活動収支の部 2事業活動支出 事業費支出 文化振興事業 顕彰費」に100,000円、贈呈式関係経費に100,000円をそれぞれ充てたものである。
「事業運営調整資金積立金取崩収入」は、「同積立金の内100,000円」を取り崩し、「I事業活動収支の部 2事業活動支出 事業費支出 文化振興事業 印刷製本費で会報等の刊行物発行経費」に充てたものである。
- ・II投資活動収支の部 2投資活動支出 特定預金繰入支出は、次のとおりである。
「事業運営調整資金積立金繰入支出」は、将来の事業運営調整資金として200,000円を「同積立金」に積み立てたものである。
「創立150年記念事業積立金繰入支出」は、函館文化会が創立150年を記念し行う事業の費用に充てることを目的として100,000円を「同積立金」に積み立てたものである。
「退職給与引当金繰入支出」は、職員退職支給基準により事務局長の退職給与100,000円を「退職給与引当金」に繰入積み立てたものである。

